

---

# 歌ってレディバード

パール・フリーリング

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歌ってレディバード

### 【Nコード】

N1485W

### 【作者名】

パール・フリューリング

### 【あらすじ】

イリス・カナリーは養母の莫大な遺産を受け継いだ二十五歳。合衆国ユースアを離れ、東の国トウイの別荘だった家を今は自宅にして暮らしている。最愛の人を失った彼女は、トウイ人の少年ノイと穏やかに暮らしながら、もう二度と心を振り回されるような思いはしたくないと思っていた。しかし遺産の取り分を狙って遠いトウイ国まで追いかけてきた従兄弟たちに身の危険を感じたイリスは、偶然出会った男性を捕まえて宣言してしまう。「この人は、私の夫です！」

## P r o l o g u e

彼女がそこに足を踏み入れたとき、死にいくものの気配が感じられた。しかし彼女自身、その感覚が先入観にとらわれたものであると認めていた。黒檀の家具も、籐の椅子も、夜の団らんを照らすランプでさえ何年も触れられずに影と埃が降り積もっており、彼女自身も数年ぶりにこの家を訪れたのだから。本当の持ち主は、今は主の身許にいる。言い方を変えれば、白いベッドから旅立っていったことには喜ばなくてはならないだろう。あの人をベッドに捕らえているのは、彼女とて心が苦しいことだった。痩せて、病から来る老いに、命の光は失われていく光景は、痛みではない苦しみを彼女に与えていた。

この家はある人が愛した場所だった。熱帯の、乾期と雨期が交互に来る、精霊たちの生きるこの土地を愛おしんでいた。別世界のようにつえていたのかもしれない。いつも共にいたあの人がいないままここを訪れていた彼女もまた、かつての旅行で、別の国に来たというだけでなく、世界には不思議があることを思い知らされるような体験をしていた。ある滞在時に訪れた黒い猫の瞳は赤く、海の上の一部分にだけ豪雨が降っているのを見た。その後の雲の晴れ間から梯子のような光が差し、雲の形が砂浜に浮き上がり、虹は二重になったり円を形作ったりした。科学的に証明できるか否かはこの国では些事ではない。すべては世界があるべくして見せる姿であり、合衆国人が信じる救世主とその父神がすべてを作ったのではなく、この世にはスピリットと呼ばれる精霊がいて、大気に満ちて様々なものを人間に見せている。不思議や神秘は確実に存在しており、彼女たちの奇跡として日常的に表れる。

熱く湿った空気を吸うと、その信仰は肌になじむように自然になった。そんな風にして、ここにくれば、この土地にいる精霊が願いを叶えてくれるのだと信じていたときもあった。

でも、そのときのように、おとぎ話を信じられる年頃でもない。

隣に、娘の彼女と同じように顔を輝かせていたあの人もいない。彼女にとつて、この国への来訪は思い出の確認に近かった。かつてはいた、今はいない、というような。時は流れるし、人は死ぬ。彼女は一人になった。

住人を失つて死んでいく部屋から出て、彼女は砂浜に降り立った。熱せられた大気と光の照り返しでまぶしい浜は、ごみが埋まり、流れ着き、心ない人々に汚されている。それでも変わらない潮の寄せる音は、彼女を遠いところへ誘つていく気がした。生死の向こう、神秘の生まれるところ、運命の始まるところへ。

「死にきたんだね」

不意に声が聞こえ、彼女はそちらを向いた。白い髪を結わえ、首に鮮やかなビーズの首飾りを何重にも下げた老婆が、彼女に齒のないう口を見せて笑っていた。服装は、おそらくこの国の民族衣装なのだろう。異邦人である彼女には、その正確なところは分からなかったけれど。

「死にきたんだね」もう一度老婆は言った。「何故？ そんなに若く、美しいのに、お前はこれから輝くときを手放そうとしている」「美しいときは終わりました」彼女は答えていた。見知らぬ老婆に、司祭に告白するように。老婆が巫女のように見えたからかもしれない。

「母を亡くして、私の時間は止まったのです。楽しい時も、嬉しい時も、すべて」

「それは少女時代の終わり。お前は始まりを告げる者に出会っていないだけ」

「始まり？」静かな彼女の問いかけには感情の波紋が生まれる。疑惑。疑問。彼女は何かを見ようと目を凝らし始めた。

「少女から娘へ。娘から女へと変わるために必要な儀式。それは、出会いと恋」

彼女の笑みに皮肉なものが生まれた。凜々しく、しかし繊細で穏やかな美貌の面に浮かぶそれは、凄絶なほど憎々しげだった。

「恋なんて必要ないわ。誰かのために心を揺らすのはもうたくさんです」

「運命は簡単に決意を打ち砕くもの。お前は運命に会っよ」老婆は深く笑った。男性にも見えるおおらかな表情になる。

「一つ、魔法をあげよう。手を出しなさい」

彼女は言う通りに両手を差し出した。載せられたのは小瓶だった。香水でも入っただけそうな、シンプルで透明なものだ。しかし手のひらに載った瞬間、その内に秘められた炎のようなものが全身を包んだ。冷たく、熱く、彼女の心を揺らす。同じ光を宿した瞳で、老婆はまじないをかけるような、寄せては引く声で彼女を支配していく……。

「一人が耐えきれなくなった時、これを開けてごらん。お前の願いが叶うだろうから。お前は運命が始まったときに、すべてが精霊の導きによるものだ」と知るだろうよ」

その小瓶がどうなったのか、彼女は覚えていない。

風の強い日、イリスの家には潮の香りが運ばれてきた。寝室に大きく取られた窓から見てみれば、白い馬のように迫る泡立つ海を、大小の椰子の梢の向こうに見ることができる。じんわり肌に張り付く熱帯の気候に腕をさすりながら、黒とグリーンの薄手のロングワンピースを身にまとった。金色の髪を梳りはするものの、この暑さでは下ろしっぱなしは得策ではない。ねじって髪留めでとめたが、日差しによる毛先の傷みは彼女の青い目にはつきりと捉えられていた。同じく、ワンピースの肩ひもがずれたところに、ほんの少し白い跡があつて、少しだけ笑う。三ヶ月間の庭仕事による日焼けというのはあまり自慢できるものではないからだ。なにせ、ここはリゾートなのだから。

合衆国人であるイリス・カナリーがエイジア地方のトウイ国に来て三ヶ月。彼女の暮らしは、定年を迎え第二の人生を始めた老婦人と似たようなものだった。異なる点を上げるとすれば、それは老婦人たちが人生を楽しんでいるということだろう。朝起きる時間が少し遅く、その代わりに夜眠る時間は早くなったが、日中必要以上で町中に繰り出すことも、家の前に広がるビーチで水遊びをするわけでもなかった。

寝室を出て一階に下りると、キッチンから飛び出してきた小柄な影があつた。イリスにぶつかったそれは、わっと驚いた声をあげると、盆を捧げ持ったまま、ダンサーよろしくくりと一回転してイリスを見上げた。イリスは満面の笑みで告げる。

「？おはよう、ノイ？」

「おはようございます、レディ・イリス！」

イリスはトウイ語で、少年はイグレン語で挨拶を交わす。黒髪に

黒い瞳、浅黒い肌に彫りの深い顔立ちをした生粋のトゥイ人のノイは、ダイニングテーブルにひとしきり朝食を並べると、重たい藤の椅子を動かして「どうぞ！」と言った。イリスの半分くらいしか背がなくなつて、彼は立派な紳士なのだ。

朝食の支度はノイの仕事だった。トゥイ国では朝食は屋台やコンビニで買うもので、この値段交渉にイリスは少年の力を必要とした。正確には、異国人であるユースア人のイリスが地元の店に買い物に行くと、旅行者と見られ値段をつり上げられてしまうので、地元民で店主たちと顔見知りであるノイが買い出しに行く方が何かと都合がいいのだった。代わりに、イリスは彼の分の朝食も揃えるように言つてある。こちらが要求しない限り、自分が食べたいものを買える範囲で買つてきなさい、と。彼に世話してもらふようになってから三ヶ月ほど経つたが、ノイは一度も釣り銭をごまかしたりしなかつたし、まずいものも買つてこなかったから、この指示は適切だったと言えるだろう。

今日の朝の食事は、卵と香辛料の混ぜられた黄色いお粥に、からつと揚つたパンだった。香辛料のにおいと油のにおいが鼻をくすぐり、空腹を覚える。トゥイの食事は油氣が多いが、空腹にはたまらなく魅力的なおいなのだ。その反面、野菜か果物が食べなくなる。昨日はたまたまそんな気分で、今日は頼んだとおり小振りの林檎が洗つて盛つてあつた。さわやかな青い香りと、飲み物のまだ温かい豆乳の、とろつとした匂いが混ざり、夢のようなとろみの空気が食卓に満ちる。

イリスが席に着くと、ノイも正面の席についた。少々テーブルが高いので、彼は椅子の上で足を折つて座っている。スプーンを使つて食事を始めると、イリスは言つた。

「ノイ、音を立ててはだめよ」

お粥をすすっていたノイは「はい」と頷く。スプーンの持ち方は指で支えるように矯正してあつたので、それは問題がない。トゥイ

人の少年に、トウイ式ではなくユースア式のテーブルマナーを教えることは最初気がとがめたが、ノイも嫌がらなかったし、これからどこかで必要になるかもしれないと自分に言い聞かせた。彼には出来れば立派な大人になってほしい。ノイは静かにお粥を口に運んでいる。

「昼食と夕食、何か食べたいものはある？」

「レディが作るものだったらなんでもいいです」と少年は年相応にはにかんだ。彼はイリスの適当な食事を喜んで食べてくれるので作りがいがある。つられて笑顔になりながら「そんなのため」とイリスは意地悪を言った。

「ちゃんと考えてくれなくちゃ。この前みたいに、夕食はステーキでもいいかもしれないわね」

少年の頬は緩みっぱなしだった。分厚い牛肉に、歓声を上げた記憶が蘇ったのだろう。そしてそれにかぶりついて、それが一口で噛み切れるほど柔らかかったことも。今日の夕食はステーキね、とイリスは買い出しに行くことを決めた。

食事を終えると、ノイと協力して片付けをし、イリスは庭へ出た。風が強くなってきたので。前庭や玄関に並べてある鉢植えを家の中に入れなければならなかった。空は曇っている。風が雲を運んでくるのだ。肌を突き抜けるようないつもの強い日差しは和らいでいるが、このまま外に出ていると肌が赤くなってしまいうだろう。慣れたといっても、赤道近いトウイの紫外線はきつく感じられる白人のイリスだった。

トウイ国は、エイジアと呼ばれる東地域の中の、東に位置する南北に長い国だ。立憲君主制で、国王がおり、首相が政治を動かしている。世界で二番目に広いユースア大陸から、十時間以上もかかる距離にあり、住んでいる人々の肌の色は黄色かったり浅黒かったりする。



イリスが居を構えたのは、富裕層の白人たちが別荘を構えているリゾート地で、トウイ南西側の海岸沿いにあった。建物より背の高い木々に囲まれた、茶色い屋根の二階建ての建物で、家の前にある広場の階段を下りていくと、広い海岸から海に入ることができる。外から見ればちよつとした別荘に見えるが、イリスが来たときは手入れもされていなかった。家主であるティファニーが病に臥せって、もう何年も訪れていなかったためだ。三ヶ月で誰の力も借りず、ティファニーが過ごしたもとの風景を取り戻せたことを、イリスは誇りに思っていた。庭は整え、窓は磨き、海岸の白い砂には、汚れ一つ見当たらない……。

そう思ったとき、嫌な人影を見た気がして、イリスは眉をひそめた。海岸にゆっくり近付いていくと、木々の向こう、白い砂の上に二人の男の姿がある。目に留まったのは彼らが口元に運んでいる煙草の火で、二人は吸い殻を海岸に埋めるように足でこすりつけていた。イリスは階段を下りていく。

「何をしているの、あなたたち」

顔を上げた二人組　どちらもよく似た姿形をして、金髪を撫で付け、サングラスをかけていた　は、イリスの姿を認めると、嫌らしい笑みを浮かべて言った。

「よお、イリス。出迎えてくれて嬉しいよ」

「いいえ、ルイ。私はあなたを出迎えていません。マイク、吸い殻を拾って」

「はいはい、従姉どの。でもここは俺らのビーチでもあるんだぜ？」  
兄ルイより堅太りのがっちりした体系のマイクは、地面にかがみ込むそぶりすら見せず、上からイリスを見下ろして言う。

「いいえ、私のビーチです」とイリスはきっぱり言い切った。「ティファニーが私に残してくれたのだから。名義人も私よ」

「元々、ここはじいさんのものだったんだぜ？　それを、あんたの母親アイヴィーが死んだからティファニー伯母が受け継いだだけで、

元々カナリー一族のものだ」

「でも今は私のものです」このやり取りを何度繰り返しただろう。ティファニーの愛した場所で、こんな話はしたくない。早々に切り上げるつもりで、イリスは率直に聞いた。

「今日は何の用なの？ 言っておくけれど、私が分けてあげられる遺産はもうないわ」

途端、従兄弟たちの表情に粘つきが増した。「イリス」と呼ぶ声がねっとりする。腕に鳥肌が立つのを気付かれたくなくて、一方の手で腕を握りしめて睨みつけた。

「お前一人じゃあ、あの大金は身に余ると思うぜ？」

「ティファニーはあなたたちにも十分な遺産を残してくれたはずです。いい加減、私にたかるのはお止めなさい」

「十数億だろ、イリス？ 有効活用しなきゃ」ルイが言った。

イリスは腕を組んだ。「あなたたちにあげることが有効活用だと言うなら、どぶに捨てた方が資源になつてくれるわ」

かっとなりを硬直させたマイクが腕を振り上げた。気の早い従弟はすぐ暴力に訴える。彼の拳は彼女の頬に入り、その勢いで身体を折ったイリスの口の中に鉄の苦みが広がった。再び振り下ろされそうになった拳は、ルイによって止められる。しかしルイはイリスを氣遣うのではなく、冷徹に、にこやかに言い放った。

「素直じゃないから痛い目を見るんだよ、イリス。また来るよ。このままじゃ、落ち着いて話もできそうにないしな」

「何度来ても私の返事は変わらないわ」口を開けば傷で顔が引きつったが、言い切った。

「ティファニーの実の子どもでもないくせに、遺産泥棒め！」

「マイク。……じゃあ、イリス。俺たちはマクレガーさんのところにでもいるから、いつでも声をかけてくれ」

ルイは叫んだマイクを一睨みして黙らせると、嫌になるほど優しく笑いかけて海岸を去っていった。彼らが拾わなかった吸い殻を拾い上げて家に帰ろうとすると、様子をうかがっていたらしいノイが、

救急箱とビニールに包んだ氷を持って走ってくる。イリスは、見られていたことに苦悩を覚えた。子どもに見せたいものではない。この子が彼らの前に飛び出さないでいてくれてよかったけれど。

「ありがとう」

不安そうに見上げてくるノイから氷を受け取り、頬に当てた。突き刺すような冷たさが今は心地いい。感じる凍みや口の傷の痛みは、イリスを落ち着かせる。こだまする『実の子どもでもない』『遺産泥棒』という声は、彼女自身も認めている事実であったため、心のどこにぶつかっても、深く息を吸うことで押し込めた。

イリスがカナリー姓になったのは十五年も前だ。両親を不幸な事故で失い、十歳のイリスは母の妹ティファニーに引き取られた。十だけ違ったティファニーとの生活は、まるでうんと年上の親友と家をシェアしたような生活で、イリスは自分の部屋に大好きな映画のポスターを貼ることが許されたし、彼女の大人っぽいアクセサリーやファッションを融通してもらえたりもした。でもお風呂は急かしたり急かされたり、冷蔵庫のデザートには自分の名前を書いたりもした。しかし、今思えばそんな日々は、イリスの人生で最もまばゆい光を放っている。

実母と養母の生家であるカナリー家は、農場主で土地持ちだった。祖父はそれらを売った金で自動車会社を設立し、それで一山当て、異国のリゾートに別荘を持つような資産家になった。イリスの実母が亡くなった後に祖父が亡くなったため、遺産はティファニーと彼女の弟、ルイとマイクの父に当たる人に相続された。ティファニーは父の才能を受け継いだのか、相続後に始めたセレクト専門の宝石商で成功し、生前は総資産数十億の大金持ちになっていた。すでに遺産を食いつぶしていた従兄弟たちは、裕福なティファニーを何度も頼ってきており、イリスは金の無心に来る彼らと何度も顔を合わせることがある。慈悲深かったティファニーは、若くして亡くなる前にそんな甥たちにも遺産を分け与えていたが、強欲な兄弟は、イリスが養母から受け継いだ遺産をうらやみ、イリスがユースアの自宅にいた頃からずっと押し掛けてくるのだった。合衆国ユースアからエイジア地方にまで逃げてきたが、蛆がたかるように、蠅が飛ぶように、従兄弟たちはイリスの周りをうろろしている。ティファニーのことを悼む暇もない。

思い返せば思い返すほど、ティファニーは大事な人だということがいかに知らされるばかりだった。限らない愛を、誠意を、友情を、

イリスに示してくれた人だった。そして守っていてくれたのだ。ここにイリスは一人、頼れる人もなく、息を潜めて暮らしている。持っていたインテリアデザイナーの仕事は、親戚たちのつきまといで辞めざるを得なかった。他国に逃げて何もしないで暮らせるほど遺産があるのは、いいことだったのか悪いことだったのか。

「レディ。今日は家で休んでください。買い物は僕が行きます」

じっと目を閉じたままのイリスが気がかりだったノイが、高い声でそう言った。イリスは目を開け、丸い瞳を悲しげに揺らす少年に、静かに笑いかけた。頭を引き寄せ、そこから頬にかけて撫でる。

「大丈夫よ。あなたが氷を持ってきてくれたから、そんなにひどい見た目にはならないわ。それに、傷を作って保険金が出るほどの顔じゃないものね」

「そんなことないです！ レディは綺麗です！」ノイが大声で主張し、イリスは声を立てて笑った。口の傷は痛んだが、ノイのかわいらしさに比べれば、そんなことは我慢するに値するものだったからだからきつと、ステーキのソースがしみても笑っていられる。

（男手を雇わなければ）イリスは不意にそう思った。イリスとノイの二人だけでは、何かあったときに対処できない。いくらここが高級リゾート地でも、従兄弟たちは現にあやうて堂々と入り込めるのだから、自分とはともかく、この少年に何かあったとき、後悔してもしきれないだろう。ノイが家に向かって砂を蹴って駆けていくのを見て決意が固まった。新しく人と付き合うのは勇気がいるが、ノイを守るのは、イリスしかない。

食事も終わり、シャワーを浴びてしまうと、後はゆっくり休むだけだ。強い風は集まっていた雲を払い、今は穏やかに梢を揺らして

いる。大きな葉の陰が窓辺の影に更に濃い影を作り出していた。見上げれば、月が真珠のようなまろやかな色で浮かんで、その光さえも吸い込んでしまう闇から届く潮鳴りは、もう耳慣れたものではあつたけれど、こうして耳を澄ましていると、ここがユースアから遠く離れた異国であると実感する。

ティファニーとの家は、いつも部屋の中でテレビが音楽の音がしていた。音楽は、彼女の大好きなR & B。

かすかにそれと同じ音をとらえ、イリスはリビングに降りていった。テレビに見入っているノイに声をかける。

「ノイ、もう九時よ。そろそろ部屋に行きなさい」

「もう何か用事はありませんか？」

テレビを消してこちらにやってきた彼に首を振り、頬にキスをする。

「ええ、ないわ。今日もありがとう。おやすみなさい、いい夢を見てね」

「おやすみなさい、レディ」

頬にキスを送り返し、ノイは与えた部屋へと向かっていった。扉を閉める音を階段下で聞き届けると、テレビが消え、ノイがいなくなり、夜が訪れた部屋は静まり返り、イリスの気配しかなかった。彼が座っていたソファの片付けに向かうが、イリスは苦笑した。やっぱり今日も、あの子は敷布をきちんと整え、私が放り出していたはずのローテーブルの下の雑誌類を綺麗にまとめてあるのね。

イリスがこの別荘を手入れしているとき、偶然現れた彼は彼女の手伝いを始め、いつの間にか二人で暮らすようになっていた。話を聞けば、両親も亡くなり、頼れる兄弟もおらず、ここでは『食事』を手に入れていたのだと……リゾートでは残飯が多いのだということとを、拙いイグレン語で語った。イグレン語は両親の生前、観光客相手の街案内の際に覚えたものだと言っていたが、見た目こそやせ細った哀れな少年に見えれど、最初の二週間は、決して一人で家の

中をうつろつくことはなく、かと思えばイリスの手伝いをしてくれたり、彼の立ち居振る舞いは頭の良い少年のそれだったので、イリスも心を許したのだ。

今も、彼は立ち入ったところには触れようとしない。彼の私物は、彼の部屋のほんの少しのものだけだった。二人の状況は周囲から見ればあまりいいものとは言えなかったが、当人たちにとっては十分な距離と関係であると言えた。親も兄弟もないというノイと出会って二人で暮らすことになったのは、ここから十分も離れた隣人のマクレガー夫人に言わせれば『乞食に家に乗っ取られた』ようであつても、イリスは単身渡ってきたトウイで心安らげる家族を迎えたようなものだったのだ。そして、ノイもそう思ってくれると彼女は信じていた。本人が了承すれば、養子にするくらいの気持ちで、イリスにはある。今自分を取り巻く環境が落ち着けば……と思うのだが、ルイとマイクは、隣家を別荘としているマクレガー夫人に取り入って頻繁にこちらにやってくるため、なかなか話に出すことはできなかった。できるのは、精一杯彼を愛していると態度に表すだけ。

イリスはそつと二階へ上がり、ノイの部屋の扉を開けた。白いシートにくるまっている暗い色の肌の少年は、髪をくしゃくしゃに枕に押し付けて、黒い瞳を閉じて眠っていた。ベッドサイドには宝物にしている、父親が生前プレゼントしてくれたというオパールがわずかに混じった原石と、イリスが買ってやった写真立てに収まった彼の死んだ母親の姿があり、イリスは彼の母になった気持ちで、眠る少年の頭をそつと撫でた。まだ眠りが浅かったのか、手が触れると、頬が緩んだ。子どもらしい表情で、自分に子どもがいたらこんなだろうとイリスの心はくすぐられる。そうだとすると、彼は少し大きすぎるけれど。

次の瞬間、イリスははつと息をのんで、急いでベッドを離れて自室へ走った。けたたましく鳴る電話を、ノイが目覚めないうちに素早く取り上げて、耳に当てる。

『よお、イリス！ さっきはどうも』

何度この、汚れたカーペットを見るような気持ちにさせられなければならないのだろう。電話をかけてくるような人間は彼らしかないはずなのに、安易に受話器をあげた自分に舌打ちしたい気持ちになる。声の背後でがなり立てる音楽と同じくうるさい声に、イリスは冷徹な声を意識して返した。

「ルイ、飲んでいるのね」

陽気な肯定の声が返ってきた。

『マクレガーさんのところで飲んでるんだ。君も来いよ』

「いいえ。行きません。酔っているときに電話なんてしてこないで」

『お固いなあ。俺が今から行ってやろうか。ちょうどいいから』

何がちょうどいいのかしら。イリスは「お断りします」ときっぱり言い切って電話を置いた。胸のむかつきが押さえきれず、下に降りると、キッチンからワインを取り出し、グラスに注いで一気にあおった。アルコールがあつと胃から喉に突き上げる。あまり強くないので、頬が火照り、目が泣いたように熱くなった。グラスを置く音は自然高くなる。

そうした後、本当にルイたちにやってこられたらどうしようという不安が突き上げた。玄関をロックしただろうか。ノイが起きないようにしなければ。

玄関に向かったとき、インターホンの音がし、イリスは鍵をかけようとして、間に合わなかった。顔をのぞかせたルイは酒に酔った赤ら顔で、一気に部屋に押し入ってきた。

「出て行って！」

「ご挨拶だな。いとこだろ、俺たち」

「あなたみたいな従兄なんていないわ。不法侵入で警察を呼ぶから」



「痴話喧嘩に来るかな？ この国は包丁を持ち出しても日常茶飯事だつて聞いたけど」

イリスは震え上がり、きびすを返してリビングに逃げ込んだ。カーテンが揺れている。窓が開いているのだ。そこから飛び出し、裸足で玄関ポーチを駆け抜ける。我ながら過剰な反応だとは思ったが、ルイに対する恐怖心は子どもの頃からの根深いものがあつた。

ルイの笑い声が悪魔のように響く。もつれるイリスのナイトドレスを鳥の羽に見立てたのか、「ほら、早く逃げないと籠の中に入れてしまうぞ」とげらげら喚き立てた。早く遠くへ逃げないと。ノイのことを思い出されて、あの子に危害を加えられたらと思うと。隣家までは時間にして十分の距離がある。マクレガー家の別荘にはマイクがいるはずで、そちらには逃げられない。しかし、もう一方の隣の別荘に今所有者が来ているのかを知らなかった。ここにやってきてからというもの、イリスがろくに外出もせず、付き合いをしないせいだ。

「ほうら、逃げろ、逃げろ。すぐに捕まえてやるぞ」ルイの声が闇に響く。離れようとしているのに、決して声は遠くならない。イリスは悲鳴をあげた。いつの間にか海辺に来ていたらしい。満ちてきた潮が、裸足の足をさらったのだ。

「イリス、イリス、小鳥ちゃん」

逃げ場はない。ここから先は海の向こうだ。逡巡は一瞬、イリスは浜辺を走り出した。ぴたぴたと濡れた砂を踏む音が鳴る。一方でルイの足音が消える。砂の上を歩き出したのだらう。

振り向くと、裂けんばかりに笑ったルイのぎらついた目が見えた。震え上がって前に目を戻すと、驚いたことに人影を見た。こんな時間に出歩いているのはイリスだけではなかったようだ。しかし向こうは追われているわけではなく、ぼんやりとした様子で波打ち際を歩んでおり、走ってくる裸足の音に気付いてこちらを見た。

トウイ人の若い男だった。黒真珠のような瞳を認識できたのは、

対比する白い珠のような月の光が彼の瞳に差し込んだからで、夜の中でその瞳は漆黒ではなく青みを帯びた黒に光っていた。

人影を見て安心したのか、イリスの足はついにもつれた。

彼がとつさに駆け寄り、膝をついたイリスを抱え起こす。

「大丈夫ですか？」

イグレン語でも本場の、キングズ・イグレンスの発音だった。

「イリス」ルイが追いつく。しかし、イリスを抱きとめている男の存在に気付いて、不審な目を向けてくるのが分かった。イリスは反射的に、見知らぬ男の袖をつかんでいた。それほど恐怖していたとも言えた。

ルイは微笑んだ。まったく完璧に、まるで恋人のように。「走るからだよ、イリス。さあ、こちらへおいで。ご迷惑をおかけして申し訳ない」

「いやよ、来ないで」イリスは震え声で返し、男に身を寄せた。でもできることなら、この男からも逃れて、走り去ってしまいたかった。全身が震える。怖くてたまらないのに、助けて、の一言を忘れてしまっていた。

しかし、男はまるでイリスに答えるように、彼女の背中に手を回したのだった。抱きしめるのに似ていた。

「失礼ですが、どちら様ですか？」

「なんだ、お前は」ルイの声が苛立ちを帯びた。普段はマイクとは対照的に温厚を装っているが、彼の本性も弟と同じだ。お酒のせいで、その皮が剥がれやすくなっている。「お前こそ誰だ。関係ないならすつこんでろ！」

「関係ないわけじゃないわ」

イリスは叫んだ。

「この人は私の夫です！」

直前に煽ったワインのせいかもしれない。恐怖のあまり冷静さを

失っていたからかもしれない。恋人という言葉も、友人という言葉もすつ飛ばして、夫という単語が飛び出し、すぐにばれる嘘を叫んでいた。

当然、ルイからあがったのは失笑だった。

「夫だつて？ そいつはトウイ人じゃないか。結婚したつて、君がこの国に来て三ヶ月なのに！」

イリスが何も言えずにいたそのとき、男の手が彼女の顎を持ち上げた。上向かされ、降ってきたのは、熱い唇だった。

あまりのことに呆然とする。自ら招いたことなのに、それすら忘れるくらい。冷えた顎をとらえる指の熱さと強さ、そして注ぎ込まれるような口の内の熱に、イリスはろくに思考できずに受け止めるばかりだった。唇が離れていくときに彼の黒い瞳が笑っており、抱きしめられながら、声を聞いていた。

「結婚を約束した、こういう関係なのですが、あなたはどちら様ですか？」

ぼんやりしていたのは従兄もだった。突然人目もはばからずにキスをしたイリスたちを、最初は当惑、次に気味の悪そうな目で見始める。イリスを立ち上がらせる男は本当に恋人なのだろうか、という疑問が彼の周りに散っていた。その彼女自身もこの人は知り合いだったろうかと考えるほど、男は堂々とした態度でイリスを誘った。「大丈夫ですか、イリス？」呼びかける声は親しく、甘い。「さあ、家に帰りましょう。ああ、あなた、もう二度と彼女に近付かないでください。彼女は迷惑しているんです」

さあ、とイリスを導く手は、優しく、大きかった。当事者で原因であるはずのイリスは何が起こっているのか把握できず目眩を覚えながら家に戻った。

そこから先のことは曖昧になってしまっている。彼がどこの誰かを聞くこともなく、他人の、それも男を家にあげたことに恐怖を抱

くわけでもなく、  
気付いたとき、イリスは自分のベッドで朝を迎え  
ていたからだ。

はつきりと覚醒していない意識でベッドの上に座っていた。空気は朝を過ぎて、昼近い太陽を感じる。閉じたカーテンからは光が漏れ、それを通して部屋は淡い橙色に染まっていた。頭痛がした。だんだん意識がはつきりしてくる。吐き出した息には、少しだけアルコールが残っているようだった。ワイン一杯なのに。

あれは夢だったのだろうか。本当は、私はワインを飲んだ後、すぐに寝たのではないの？ そうなれば、その後のことはすべて夢のはず。ルイに襲われそうになったことも、夜に浜辺を逃げ回ったことも…… 見知らぬ男にキスされたことも。

まとめたままで乱れっぱなしの髪を降ろして手櫛で梳いてから、もう一度適当に結わえ、着替えて一階に下りた。イグレン語ではない声が聞こえてくるが、テレビから聞こえてくるトウイ人の声だと思っにははつきりと実体を持っていたし、応じるようにノイの声もしていた。ノイ以外の誰かがいるのは間違いない

リビングにそっと顔をのぞかせると、真っ先に気付いたのはやはりノイだった。

「？おはようございます、イリス！？」

めずらしくトウイ語でそう言っソファからぴょんと立ち上がると、こちらにやってくる。ノイの頭を引き寄せ挨拶を返したが、イリスの意識はつい、先ほどまで彼が座っていたところに向いてしまっのだった。何故ならそこに、まったく見知らぬ男性が座っている。

やっぱり昨夜のことは現実だったようだ。「おはよう、ミスター……」イリスが当惑がないまぜになった微笑を浮かべて言うと、彼は立ち上がって微笑んだ。

「フラムです、ミス」

「イリス・カナリーです」

彼の目がきらつと輝いた。「金糸雀<sup>カナリー</sup>？」そして微笑んだ。「どうぞよろしくお願いいたします、ミス・カナリー（金糸雀嬢）」

差し出された手は、ゆうべ触れた最初の印象のまま、力強くイリスの手を握り、太陽の光を受けた表情は紳士的であり柔らかで、魅力的に映った。夜の初対面の印象から、推測した彼の年齢がぐつと下がる。少し年上か同じくらいかと思ったが、もしかしたら年下なのかもしれない。全体が黒く濃いだけではなく、洗練してまろやかになった顔立ちだった。エキゾチックでハンサムな人だわ、とイリスは少々気後れする。金糸雀嬢とからかう声に胸が高鳴る。そしてその目。瞳の色は黒いのに、なんて澄んでいることだろう。

フラムという名前は本名なのか、少々頭を悩ませる。トウイ人の名前には姓がなく、親の名前が姓の代わりをしていることが多い。また多くの名乗りは通称で、ノイだって実は長い名前があった。イリスでは正しく発音できないが。

「ミスター・フラム。昨夜はありがとうございました」この言い方で礼儀は欠いていないはずと信じて、イリスは微笑みを浮かべた。「でも、もしかして私、あなたに失礼をしたのではないでしょうか？」

そうとしか考えられない。どうして彼が我が家にいたままなのかという説明がつかないからだ。

「こちらに帰ると、安心されたのか、あなたは眠ってしまったわねんです」とフラムは責めるのではなく言った。続くのは、笑いを含んだ謙遜の言葉。

「戸締まりをしては私が出て行けなくなってしまうので、ご迷惑だとは思ったのですが、ここで一晩過ごさせていただきました。生きたセキユリテイだと思ってくださればいいのですが」

イリスは赤面するしかなかった。

「こちらこそ、大変なご迷惑をおかけしました。助けていただいた

のに、無礼な振る舞いで、本当にごめんなさい」

「その内ノイが起きてきたので相手をしてもらっていました。申し訳ないですが朝食をごちそうになりました」

イリスは時計を見た。目を見開く。「十一時！　ノイ、ちゃんとご飯は食べた？　私を待つて食べ損なっていない？」早口で聞くと、フラムがくすくすと上品に笑った。

「私が説得して、八時頃に二人で食べました。あなたを待つと彼は言ったのですが、私が限界だったんです。もしルールに反してしまつたなら、彼は叱らないであげてください」

「叱るなんて！　ありがとう、ミスター。あなたがいてくれてよかった。ノイに空腹を感じさせずに済んだわ」自分が限界だというのは多分嘘だろう。彼はきつと落ち着かないノイを見かねて、食事しようと言つたに違いない。「本当に、ありがとう」もう一度、心から言つた。ノイにひもじい思いをさせるのだけは、絶対に嫌だったのだ。

「レディ、食事はちゃんと冷蔵庫にとつてありますから！」少年はこちらを見上げて言う。

「ありがとう。少しお腹がすいたわ。でも、もう少し待つて昼食にしてしまつていうのはどうかしら？　ミスター、よかったら一緒に昼食はいかがですか？　私、お礼のひとつもしていないって氣付いてしまったの」

そう言つたのは、彼がひどく紳士的に思え、ノイに対する態度に好感を持ったからだつた。ノイが嫌がつていない。彼は、本当に紳士なのだわ。

「ありがとうございます。ごちそうになります」とフラムは柔らかに微笑した。

ダイニングをノイに任せ、イリスはキッチンの壁にもたれた。さあ、何を作るう？ 食材はある。早く使ってしまったければならないものもない。せっかくだから、洋食を作りたかった。トウイではなかなか口に出来ないようなものを。ノイとの食事で、こういうものがトウイ人に好まれるか大体分かるようになっていたが、口に合わないとお礼にはならない。

「ミスター、何か食べられないものはある？」向こう側に声をかけると、彼は向こうから大声を張り上げるのではなく、こちらにやってきて、答えた。キッチンに立った彼に、思わず仰け反りそうになってしまう。この人、エイジア人にしてはずいぶん身長が高くて、しなやかな黒猫が大きくなったよう。

「いいえ。何も。苦手なものありません」

「じゃあジャンバラヤにしようかしら。スープはコンソメ。サラダをつけて」

「あなたが作るのですか？」あまりにびっくりしたような声に、イリスこそびつくりした。

「ええ。どうして？ そんなに驚くようなことかしら」

「家政婦はいないのでですか？ ノイは」

「家政婦も使用人も雇っていないわ。ノイは、ただのお手伝い」答えてから、トウイ人の彼には、私たちの関係は奇妙に映るでしょうね、と胸の内でもひとりごちた。白人の女が、トウイ人の少年に部屋を与えて一緒に暮らしていることは、人によれば住み込みの使用人をいいように使っている風に思えるのだと、隣人の言動で確認済みだ。家族同然の、家族でない他人。でも、イリスはノイのおかげでここでの暮らしが助かっているから、結局は主人と使用人の関係の変形なのかもしれないけれど。

「食事も掃除も、あの子に手伝ってはもらっけれど、私の仕事だけ



ら」

じつとこちらを見ていたフラムは、ぱん、と合わせたイリスの手の音に、夢から覚めたように揺れて、瞬きをした。

「さあ、お客様は座っていてくだらないと。ノイ、お湯が沸いたから、お茶の用意をしてくれる？」

ノイが飛んでくる。机を拭いた布巾と交換で、茶器を持っていつてもらう。トウイのお茶は、紅茶をおいしく入れられるイリスでもまだうまく入れることはできなかったから、本格的なトウイ式のお茶を飲みたいときにはやはりノイに任せてしまつて、イリス自身は今ほこつそり勉強中なのだった。

「？お茶をどうぞ、フー・ラム様！」

フラムはイリスの顔を見て、イリスが肩をすくめて促すと、ノイの後についてリビングに向かつていった。イリスが眠っている間に、親しくなったのだろう。ノイは物怖じすることなく、にこにここと笑顔を浮かべたままトウイ語で何か話しかけていた。トウイ語は日常会話程度のイリスには細々と聞こえてくる話の詳細は分からなかった。ので、お客様のお相手はノイに任せて、冷蔵庫から食材を取り出した。

「？君は雇われているわけではないのか？？」フラムが尋ねると、はい、と少年は素直に頷いた。

「？住まわせていただいて、お給金もいただいています、レディは僕を家族のように扱ってくださいさるんです。雇われているようでそうでない、という感じでしょうか？」と、フラムが尋ねようとしたことを察して答えた。頭のいい子だ、とフラムは感じた。そもそも、リビングにフラムの姿を見つけたときから、寝起きだったはずの彼は真つ先に「？こんなところで何をしていらっしゃるんですか？？」と丁寧、大人のように訊いたのだ。万が一、相手が客人では、イリスの面子をつぶしてしまうと危惧してのことだろう。もちろん、

もし暴漢であればいつでも応戦できるよう、距離を取ったままで。知り合いらしい男に追い回されていたことを伝えたときの礼の言い方も、フラムの気に入るところだった。

「？彼女がユースア人で、ここに長期滞在するつもりだということは聞いていたが…… どのような素性の人物なんだ？ どうやらたちの悪いのに追い回されているようだったが？」

ノイは悄然と肩を落とした。「？資産を狙われているようなのです。莫大な遺産を相続して、親戚の方々に更なる取り分を要求されていて。ユースアからトウイランドに来たのは逃げるためだったようです。従兄弟たちが彼女を追い回しているんです？」

「？それは、彼女が君に話したのか？」

ノイは首を振る。浮かんでいる表情は苦笑だ。とても大人びている。「？僕が彼女のそばにいるのを知っているので、彼女の従兄弟たちが色々話して聞かせてきました。そんなことしたって僕がレディを裏切るはずなのに？」

どうぞ、と差し出された茶はいい香りがした。香しいそれを飲むと、深い息が内側から漏れる。

「？君は茶を入れるのがうまいな？」

褒め言葉は本心だった。ノイはくすぐったそうに笑う。その仕草は、少しイリスに似ている。ともに過ごすうちに似てきたのだろう。

「？この家には、君たち二人だけなのか？」

「？はい。でも、男手が欲しいから手伝いを雇うかもしれない、ということとは言っていました。今のままでは、力仕事に不安がありますし？」

「？そうだな？」とフラムも同意した。目の前に座っている少年は十歳だと聞いたし、今大きくフライパンを振っているイリスの腕は、見るからに力仕事に向いていない華奢さだ。昨晚抱きとめたときも、折れそうなほど細く感じられた。しかし首筋から香っていたのは年頃の女性の甘さで、トウイの香と異国の風のおいが混じって、思わずくらしとしたのを回想する。だからここで一晩明かしたのかも

しれない、とフラムは思う。家に満ちるにおい、イリスの残り香は、彼にとって離れがたいものを含んでいた。懐かしく、遠い、何かを思い出させるもの。

今は肉と野菜を炒めているにおいがしている。食欲をそそる強いにおいに誘われたわけではないが、キッチンに立つイリスをしばらく見ていた。冷蔵庫を開け、鍋を覗き、手早くフライパンを動かす。名前の通り、小鳥のように敏捷に動くんだな。

「？彼女は料理が得意か？？」

「？僕はおいしいと思います。彼女の料理がとても好きです。フー・ラム様のお口に合えばいいんですが？」よどみない賛辞を交えた返事に、フラムは不敵に笑った。

「？お手並み拝見といこう？」

肉と野菜を細かく切り米と一緒にいためて蒸したものと、玉葱が溶けるまで煮込んだコンソメスープ、洗っただけの新鮮なサラダを食卓に並べる。ノイももちろん手伝ってくれた。「ちよつと手を抜いてしまったの。作っていてお腹がすいてしまつて」と肩をすくめて言ったのは照れ隠しだった。自分の料理を食べてほめてくれたのは、ティファニーと、ノイしかいなかったのだ。

だから、フラムがスプーンでジャンバラヤをすくいあげて口に運ぶのを、初めて誰かに作った料理を出したときのように、真剣に祈りながら見ることになってしまった。

「美味しいです」

最初の一言に、緊張は半分霧散する。

「いい香りですね。タイムと……」

「白ワインを入れてあるんです。それからこの国の人は辛いのが好きかなと思って、チリペッパーは多めにして」

「ああ、だからでしょうか。懐かしい味がするのに、異国の味がします」ほころぶように微笑むフラムに、イリスの心はふわりと浮き立った。残りの半分の緊張が、胸を弾ませる動悸と照れに変わる。素直に嬉しい。彼がその間にもスプーンを口に運んでくれる。しかしそれだけではないのは、イリスも認めるところだった。礼儀正しく心温かな友人を、イリスはずっと求めていたのだ。

「レディ、僕のは辛くありませんよ？」

気付かれたか、とこつそり舌を出した。しかし正当な理由はある。「子どもは刺激が強いものをあまり食べてはいけないわ」

不満な表情をするので、笑いながら自分の器から取り分ける。ノイが辛党なのは、ここに来て一ヶ月くらいまでの朝食で実感済みだった。

「これで我慢してくれる？」

「はい、と彼にしてはめずらしくふてくされた返事だった。だから「あんまり辛いと、豆乳プリンがおいしくないわよね」と何気なく言つと、ノイの目が輝いた。笑みを浮かべてジャンバラヤをほおぶるので、「頬は膨らませちゃだめよ」と言うことになったが、今度の返事は弾んだものになっている。豆乳とたつぷりの砂糖、ゼラチンを加えたプリンは、今ゆっくりと冷蔵庫の中で固まっているところだ。」

気付けば、フラムのスプーンが止まっている。不安になる。

「やっぱり、お口に合わなかった？」

「いいえ」たつぷり時間を取って彼は言った。「あなたの眼差しに魅入っていました。とても優しくノイを見るんですね」

イリスはくすぐったくて肩をすくめる。

「そうですか？ 自分では気付かないんだけど」

「恋人にもそんな目をするのでしょうかね」

「そうだったらいいと思うわ。でも最後には言われてしまうの、君って僕の恋人？ それとも母親？」

おどけた口調に、フラムは目を細めて穏やかな笑い声をたてた。一矢報いるのとは違うが、会話をもてなせたことに少々安堵する。これで彼のことを聞きやすくなった。

「昨夜はありがとうございました。驚いたでしょう？ 彼は親戚で、酔っていたから冗談が過ぎたみたいなんです。散歩を邪魔して本当にごめんなさい」

「いいえ。あの夜は……」と何か言いかけて、フラムはつかの間口を閉ざしてから、言った。「外国の方であるあなたには少々言いにくいのですが」と前置きする。

「何を言われても気にしないわ。どうぞ」

「占い師に、あの夜、『大事なものを見つける』と言われた日だったので」

思いがけない内容に目を瞬かせると、ノイが言った。

「トウイでは占いは一般的です。例えば、生まれた日が何曜日生まれかによって、お祈りする像が違ったりするんです。古い一族では、大事なことを占いで決めることもあるんですよ！」

占いと言えばホロスコープが主だったユースア人のイリスでは、そういうものもあるのかと不思議に感じられたくらいだった。何をそんなに気兼ねすることがあるのだろうか？

「なかなか非科学的でしょう？」だから彼が失笑して言ったのに、思わず本音を言ってしまった。

「どうして？　そういうお国柄なんでしょう、卑下することなんてないわ」

このリゾート地は首都から離れたところにあって、近代的な高層建築を見ることはないが、この国がとても豊かなのは分かっているつもりだ。豊かというのは、文明が発達していることだけではなく、その国に住む人々の心根や、自然といったものも含まれる。そういうことを語りながら「この国はとても綺麗なもの。私は好きよ」とイリスは笑った。

「それで、何か見つけられたんですか？」

「……え？」

彼は目をまたたかせ、ああ、と吐息をしてから、イリスの瞳を見つめながら微笑みを交えて答えた。

「何も見つけられず、あの浜辺を歩いていたのです」

「ごめんなさい」イリスの言葉に、フラムは「なにがですか？」と気の抜けたような戸惑いの声を漏らした。

「だったら悪いことをしてしまったから。この家に拘束してしまっただけでしょう？　大事な日だったでしょうに」

占いの言葉を聞いてまず思い浮かべたのは、生涯のパートナーというものだった。彼はきつと大事な人間に会うはずだったろうに。想像も甚だしいかもしれないが、しかしおそらく、彼の生涯に関わる何かがあったはずだということは、占いによれば確かだった。

「外国人の女と……『ああいうこと』をするはめになるなんて……」

気の毒すぎた。

しかし、フラムは微笑を浮かべた。イリスを見つめ、深く。

「? いいえ。 あなたを見つけた?」

何が「? いいえ?」なのだろうと、それだけ聞き取っていぶかし  
く思ったイリスが何か言う前に、彼は聞いた。素早く。封じら  
うに。

「この別荘にはいつまでいらっしゃるのです?」

「ええと……決めていません。あと一ヶ月はいると思うわ」不意を  
つかれて少し混乱しながら答える。

「二人だけで暮らすのですか?」

「今のところは、そうです。もしかしたらお手伝いを雇うかもしれ  
ないけれど」

「ええ、男手がほしいとノイから聞きました」

「ええ……そういう話はしていました」話の筋が見えない。曖昧な  
がらも頷くと、満面の笑みにぶつかつた。

「私を雇っていただけませんか?」

がしゃん。落ちたのはノイのスプーンだった。ぽかんと開けたイ  
リスの口は、慌てて少年の目の前に飛び散った米や野菜を拾うため  
に閉じられる。もうそれほど熱くはなかったので、ノイはやけどし  
なかつたようで安堵したが。

「あの……ちょっと、待つてくださる? あなたは……そういう方  
じゃない、でしょう?」言い方が曖昧になつてしまつたが、言いた  
いことはそれがすべてだった。リゾート地の夜に出歩くような人間  
は、使用人という仕事を欲するような家柄ではないはずだからだ。

「一昨日で長期の仕事が終わつたところだったのです。昨日は休暇  
で、今日からどうやって次の仕事を得ようか考えていたところでした。  
何なら、紹介状を書いていただいてきます」

この海岸に沿つていったさきに、岬がある。その岬の屋敷が、彼  
の以前の勤め先なのだという。見たことがあるから分かる。イグレ

ン建築とトウイ建築が混ざったようなかなり大きな家で、地元の資産家の別宅なのだとノイが言っていたのを思い出した。それでも不安な表情をしていたためか、フラムは苦笑しながら胸のポケットを探った。

「最初にこれを出すべきでした。どうぞ、確認してください」

出されたのはカードだった。身分証明書なのだろう、顔写真があり、数字の記載があるが、その他はトウイ語だ。ノイが興味津々に覗き込んでいる。分からない、とは言えなかったので、ノイが隅々まで見て取れる時間をおいてから、そつと返した。

「あなたがちゃんとした方だというのは分かりました。でもここに住み込んでもらうわけには……」

「当然です。近くに家を借りて通います」きつぱりとフラムは線引きをした。

イリスは考えた。助けてもらった恩もある。偶然が引き寄せたのなら、従うのがいいのかもしれない。これから新しく、信頼の置ける誰かを見つけ出して交渉するのは、彼女にとってはとても労力のあることだ。

思い出したのは、けれどやはり、キスのことだった。躊躇いもなく見知らぬ女に口づけられる……この人はもしかして危険なのかもしれない。見つめた黒い瞳は少年のように若々しく、きらめきに溢れて、影などないように思える。それでも彼がとても彼自身の証言が正しいと思えるほど、身分は低いとは感じられなかった。彼のイグレン語は完璧だ。イリスが恥じ入るほどに。テーブルマナーも、よく考えれば気になったところがなかったほど、彼女にとって自然だった。でも、それをもっと考えてみれば、彼の以前の勤め先だというトウイの資産家の屋敷で学んだことだとも考えられるし……イリスの頭の中は混乱してきた。昔からいつもそうだ。考えすぎて分からなくなる。



「レディ・イリス……」ノイが小さく声を上げ、フラムが言った。  
「いとこ殿に嘘をつくなら、私がいた方が都合がよくありませんか？」

イリスは額を押さえてため息した。その問題があった。ルイはマイクに報告しただろう。確認のために再度来訪するのは間違いがなさそうだった。本国の親類に話が及んでいると収拾がつかなくなりそうだが、もう考えないようにする。乗り込まれない限り、接触する必要はない人々だからだ。

インターホンが鳴る。予感ほ、どう考えても来訪者は従兄弟たちだと知らせてくる。朝方まで飲んでいて、起床してこの時刻なのだろうとは簡単に推測できた。

「私が出ましょう」と、イリスがほんのわずかな躊躇を見せた隙に、さつとフラムが立ち上がる。そして、片目をつむってみせた。「二階からでも聞き耳を立てていてください。ちゃんと追いついてみせますから。」

イリスが二階に上がると、その後ろをついていこうとしたノイは、しかしフラムにも言いたげな視線を投げ掛けてきた。その意味は様々あるが、フラムは言った。

「？意外に思うだろうが、酔狂ではない？」

ノイの目に、わずかに批難の色が浮かぶ。

「？召使いの真似事をなさらずとも……フー・ラム様なら、レディも歓迎してくださいますでしょうに？」

「？素直に名乗って受け入れられるとは思いがたいな？」フラムは緩く腕を組んだ。少年は唇を曲げる。彼もそう思ったのだろう。

「？占術の御言葉は？」ノイの目が真剣味を帯び、射抜くように鋭くなる。「？レディに関係することだったのですか？」

トウイ民族の一部の家系には、誕生日ごとに占いによって予言を与え祝う習慣を持つ者たちがいる。当たり障りのないものもあれば、断定的なものもあり、古すぎるその行為を馬鹿馬鹿しいと笑う少年時代を、フラムやいとこたちは送った。習慣と伝統を重んじられる成年に成長した今は参考程度に聞いているが、今年聞いたものは、彼にとつてかなり頭を働かせなければならぬ言葉だったのだ。

フラムは低く呟いた。

「？お抱えの占い師は、私が伴侶と出会うと言っていた……？」

階上からイリスが呼ぶ声がしている。それに答えようとして、インターホンが邪魔をした。こらえ性のないやつらめ、とフラムは目をすがる。彼女の従兄弟があまりいい性質を持っていないことは、昨夜の一件でもう分かっている。

ノイは、かわいそうに、驚きで丸い目を更に目を丸くした後、威嚇するようにフラムを睨んでいた。

「？言つたろう？ 昨日から休暇なんだ。休暇が一日で終わつたとは私は言っていない。仕事の心配はしていたがね？」玄関に向かい

つつ、上へ行くように手を振って、言った。「？それに、私のことを知らない人間と過ごすのも悪くはないさ？」

ドアを開けると、二人の男が立っていた。夜目には分からなかったが、金髪碧眼の白人で、お互いによく似た顔をしていた。いかにも大学を出て実業家を気取っている富裕層の坊々だ。しかしフラムはそれが偏見に基づくものであるという自覚があった。エイジア人の彼には白人は判別がつきにくい。逆の場合もしかりだ。

「昨日はどうも」と、戸惑いを浮かべる彼らにフラムは言った。一方は彼の存在が半信半疑だったらしく、幻を見るように目をしばたかせている。それだけで、イリスがしばらく恋人の影もなかったことが確認できた。

「やあ……イリスは？」聞き覚えのある声が言う。昨日会ったルイの方だと見当をつけた。女性をサディスティックに追いかけ回すような男とは、あまり付き合いたくはないが。

「彼女は会いたくないと言っています」

「お前は誰だ？」ここでようやくフラムの存在が夢でないと確認できたのか、マイクが大声を張り上げる。「ここで何をしてる！」

「そちらの方から聞いたのでは？」フラムはにつこりした。「イリスの婚約者です」

裏を見せない笑顔に怯んだようにマイクが黙り、ルイを伺っている。しかし兄の方が冷静だった。腕を組み、「君がイリスの婚約者だと言うなら」と言って、にやついた。「証拠はあるんだろうな？」

「証拠？ 私がここにいて、それだけで十分ではありませんか？」

「何かあるだろう？ 婚約指輪とか、親と映った写真とか、誓約書、だとか」最後の言葉に彼は力を入れた。それは二重の意味を含んでいた。ルイは、フラムが金で買われたと思っているのだ。「いくらもらって、そんなフリをしてるんだ？」

その時、フラムは背後でドアが開く音を拾った。ノイの声がして、

トウイ語で「待ってください」と静止している。押し問答をしているようだ。トウイ語で叫んだのは、ノイがこちらにイリスの行動を知らせようとしたからだろう。その甲斐はあまりなく、風の強い外にまで聞こえる声で「どいてちょうだい！」とイリスが叫んだ。フラムは後ろに怒鳴った。

「？ノイ、イリスの服装を、できるだけ乱せ！」

困惑の極みだったのだろう、返事はなかったが、フラムは焦ることなく、遺産を狙う男たちに言った。

「言ったでしょう、私がここにいるのが証だと。どうしてイリスが出てこないと思いますか？ 彼女は『寝室で寝ている』から、私が代わって応対に出たのです」

そして髪を乱し肩で息をするイリスの登場で決まりだった。ワンピースドレスの肩紐を掛け直す彼女の姿はいかにも急いで支度をして寝室から出てきた、という姿で、イリスが嫌うような人間なら彼女とフラムがそれまで何をしていたかという想像力を見事に働かせてくれるはずなのだった。そんな想像をされていることは夢にも思わないイリスは、青い瞳を怒りに燃えさせ、フラムの前に割って入ると、面喰らっている従兄弟たちに言い放つ。

「彼に失礼なことを言うのは許さないから！ ルイ、あなたが私にしたことを、私は忘れてはいないわ。二度と家に上げる気はありません。マイクも同じよ」

「イリス」

「分かったら、二度と接触してこないで。そうすればいつかはいいことがあるかもしれないわ」あまりの剣幕に押された従兄弟たちの前で、イリスは音高くドアを閉めた。

大声を張り上げたために乱れた息でリビングを突き進み、ぐしゃぐしゃと髪を掻き回す。ノイがこわごととフラムの背後に現れ、様子をうかがった。フラムは言った。彼の思いも代弁するつもりで。

「何故あなたがそんなに怒るのです？」

「怒らずにいられる？　あなたたちを侮辱する権利なんて、あの二人にはないのに！」

つい数分前まで、穏やかに食事していた女性とは思えない振る舞いだった。かと思うと、不意にその場にしゃがみ込む。気分でも悪くなったのかと駆け寄ると、その肩は震えていた。「大丈夫よ」と彼女は平気そうではないが、笑った声で言う。

「大丈夫よ……あの二人に大声を出すなんて初めてだったから、今になって震えがきちゃったの。いじめっ子だったんです、あの人たち」イリスの吐いた息は震えていた。「もう来ないかしら？」

フラムは彼女の、腕をさする手を取る。強く見えるのに弱い、弱く見えるのに強い。見るたびに捉える色が違うオパールのような女性だと思った。しかし、取った手は乳白色で柔らかくとも、秘めた熱を予感させて、温かい。

「来ても私が追い返します。私はあなたの夫ですから」

イリスは弱々しく微笑んだ。「彼らにとっては、ね」彼女は決してフラムの台詞を本気とは取っていなかった。彼女のその言葉で、これからの生活は決まったようなものだったのだが、このときのイリスはまだ気付いてはいなかったのだ。フラムは決めた。

「？　嘘にするつもりはありませんよ？」

困惑の顔をするイリスの手を取った。やはり、彼女はトウイ語が堪能ではないらしい。それすらも楽しいのは、彼の手の中にある柔らかな家事をする美しい女性の手が逃げることを知らないからだ。その爪に口づけながら、フラムはそつと微笑した。この若く美しい、異国人の女性……彼女を、私のものにする。

イリス・カナリーのある一日の生活は、フラムからしてみれば、リゾート地にいる外国人とは思えない、信じられないほど静かなものだった。

彼女は朝九時に起きて、同居人の少年が揃えた朝食を食べ、日差しが強くないうちに庭の仕事をし、昼食を作って食べ、家の掃除を暑気が和らぐまで行ってから、夕方頃に海岸の掃除に出る。日が沈む頃に家に戻ってきて、また夕食を作って食べ、夜九時に少年に声をかけて部屋に向かわせ、フラムにその日の仕事の終了を告げた。彼女が眠る時間は聞かなかったが、おそらくそれから一時間も起きていないだろう。隠居した老人のような生活だ。他国のトウイへ永住してきた元気のよい裕福な年寄りたちはフラムの普段の付き合いの範疇だったが、イリスはそれにもまして外の世界に人がいようといまいとおかまいなしの平坦さだった。一体何を求めて生きているのだろうかと見ていると、それは、彼女のふとした瞬間の瞳に表れた。

掃除を終えてベランダに出て、本を読んでいるとき、彼女は何かに呼ばれたように、海の方を見て耳を澄ませているときがあった。どこか遠い、深く届かない場所の、精霊の声を聞いているように、青い瞳はほんの少しの悲しみと、悲しみが呼ぶ風いだ感情が霧のようになり立ちこめているのだった。

またある時は、夕方の庭先で、花に水をやりながらわずかに笑む唇に憂いと行き場のない孤独が感じられた。

ノイを見るとその表情は消えた。彼女は同居人を心から愛していて、愛があればその影は拭われる。

フラムは確信を深めた。イリスは、愛してくれる人間を求めているのだと。

今日の午後のイリスは、庭の緑にホースで水を撒いていた。草木の作る影は暑さを和らげるものの、彼女の髪をまとめあげた首筋がうつすら汗で光っており、草いきれと彼女から漂うものにフラムは思わず目を吸い寄せられた。誰も見る者はいないと、毎日似たようなワンピースに身を包んでいるが、肩甲骨の上部分が覗いており、それを辿ってみたい気持ちにさせられるほど、彼女は美しい骨格をしている。

「切った枝、持っていてくれた？」イリスが突然振り向いた。驚いた顔を見せてしまったのか、「あなたが立っていると、影ができて涼しいの」と笑って解答を口にする。

「あなたが来てくれて助かったわ。でも、時間が余ってしょうがないわね」

「お出かけにはならないのですか？」ずっと聞いてみたかったことを尋ねる。返ってきたのは苦笑だった。

「明るいのが好きじゃないの……外出先で鏡を見たときぞっとしたことはない？ 家の中で支度をしたときは完璧だと思ったのに、外に出るとなんて醜い！ っていう」

夜遊びはしない、それも嫌いなタイプか。それは十分に彼を満足させた。色気を振りまくようなタイプは飽き飽きしている。

「おかしいですね。私の目からすれば、あなたはとても魅力的です。その金を梳いたような髪も、内側から輝くような肌も、優しい宝石の青い目も」

彼女は、あの顔をした。「そう言ってくれるのはあなただけね」そうして言葉を遮断するようにして、背を向けてホースの先を振っている。

「イリス」

「困るから止めてほしいの、そういうこと」低く彼女は言った。「誰にも恋なんてしたくないから」

フラムが何か言う前に、彼女はぱつと振り向く。浮かぶのは笑顔、しかしお愛想だ。

「私は、普通の人が普通だと思ふことが、あまり得意ではないの。一人は寂しいからいけないなんて思つたことはないし、お金があつても嬉しいものではないと思ふし……口説き文句が自分に必要だと思つたことはないわ」

「あなたは綺麗です、イリス」

「必要ないわ、フラム」事実だけを口にした彼に、イリスは緩く首を振つた。「家の仕事は好きよ。家を綺麗に掃き、拭き清めて、花を飾つて、食器を揃えて。家は私のお城で、すべて私にとって完璧にしてあるの。誰にも邪魔されたくないのよ」

「そうして、心を殺していくつもりなのですか？」

イリスは手を止め、ゆつくりと微笑を浮かべた。

「振り回されるのは、もう疲れたわ」

水たまりを作りつつあるホースの元栓をひねり、片付けを始める彼女の手からそれらを奪う。その弾みでホースの先から水のしずくが足下に落ち、一歩退いたイリスを、すぐにフラムは引き寄せていた。彼女は彼を見た。彼もまた彼女を見た。ぬるい水と緑の青さが香る。視線が絡まる。

イリス・カナリーが、心許せる誰かを求めているということは、フラムにとって周知の事実だった。そうでなければ、異国人の子どもや、仕事をさせてほしいと転がり込んできた男を迎え入れるだろうか。彼女は寂しいのだ。自分でそれと知らないだけで。

だから唇を寄せた。はつと息を呑んだのは、静止の声をあげようとしたのだろう。聞けば止めてしまふ分別が彼にはあつた。だからそれよりも早く、深く唇をむさぼつた。夜の唇はアルコールの味がしたが、昼のそれは熱い水とレモンの味がした。冷たい水を飲み干すように、彼はしつこくそれを求めた。しかし、乾きはひどくなる一方だった。芯に熱い火がとる。



しかしそれ以上燃えてしまう前に、フラムはなけなしの理性を働かせた。まだ昼日中で、しかも家にはノイがいた。お互いに微妙な空気が漂えば、彼はそれを簡単に察してしまうだろう。最初に考えなかったわけではなかったが、イリスとのキスはそれを一度横に置いておくくらいの価値があった。

離れた彼女の瞳は驚きと熱に光っている。彼女にとっても、この口づけは心を揺らすものだったのだ。しかし、彼女はぐつと眉を寄せて、乱暴に唇を手の甲で拭った。ありありと批難の目を向けて。「傷つくことが怖い？」自然と責める口調になる。「そんな初步的なことを恐れていては、大いなる喜びは手に入りません。ゆっくりと死んでいくのと同じです」心を癒そうと笑顔を浮かべることは容易かったが、今、彼の頭を支配しているのは、彼女に寄り添うのではなく彼女に殻を破らせるのはどうしたらいいだろうかということだったからだ。

「死にたいのよ」イリスは呪文を呟くようにさつと言い放つと、何かに気付いて向こうを見た。草むらの影で慌てて飛び上がったのは白人の女性だった。

「マクレガー夫人」

「まあ、イリス、こんにちは。今日も暑いわねえ」

忌々しそうな口調で名を呼んだイリスは何か言いたげだったが、「そうですね」と言うだけにしたようだ。マクレガー夫人の好奇の目は、もうこちらに向けられており、イリスは一つ息を吐くと、彼を紹介した。

「私の友人で、フラムと言います」

「ごきげんよう、マクレガー夫人」につこり笑って近付き、手を差し出す。

「ごきげんよう、フラム。どうぞリンダと呼んでちょうだい。イリ

スとお隣さんだもの。でもあなた、どこかで見たことがある気がするんだけど……？」

「どこにでもあるような平凡な顔だからでしょう。もっと分かりやすい、例えば瞳が美しいなどあればいいのですが。あなたのように」  
「あら。お上手ね」まんざらでもなさそうに夫人は言い、イリスに向かつて首を伸ばした。

「イリス。何か困ったことはない？ あなた一人だもの。男の子一人じゃ不安でしょう」

イリスはどこか刺々しい笑い方で答える。

「お気遣いありがとうございます。でも、大丈夫ですわ。ノイはい子ですもの」

「お優しくていらつしやるのですね、リンダ」

「そんなことないわ。困っている人を助けるのは当たり前よ」

「その心を嬉しく思います」フラムは微笑む。

「ですが心配いりません。そのために私がいますから」

「あら、そう？ でも何かあったら言ってちょうだいね。それじゃまた……」

忙しなくマクレガー夫人は踵を返した。フラムは肩に入っていた力を抜いた。これから噂話に興じるつもりであろう背中を見送り、イリスに尋ねる。

「彼女はこういう方なんです？」

「マクレガー氏はユースアで会社を営んでいた方で、引退してこちらに。夫人はこのリゾートの隠居者をまとめる役をしていらつしやるみたい。私は参加したことはないんだけど。社交界ともつながりがありだそうよ」

そこでようやく思い当たった。マクレガー家といえばユースア人の資産家で、夫人の派手好みは有名だった。投資という名目のお金のばらまきが好きなのだ。

なるほど、この顔に気付いた原因はテレビか新聞かと思ったが、『その場にいたのか』。

イリスは家の中に声を放った。

「ノイ、夕飯の買い物に行きましょう！」

家の中を駆け回る少年の足音がする。緑の影から影へ足を踏み出すイリスは、まるで自分を励ますように腰を当てて深く息を吐いた。後ろから見ていれば、虚勢を張っているのは明らかだ。

「あなたは どうする？ 留守番をしてくれてもいいけれど」できればその方が心穏やかだ、という口調だったので、いささかむっとしながらフラムは言った。

「お供します、レディ」言葉で距離を作る。これで満足だろうかと彼女を見れば、イリスの瞳には、何故か辛いものを堪えるような色が浮かんでいた。距離が欲しいと訴えたかと思えば、彼女は言葉にならないもので寂しさを叫んでいる。どちらが本当の心の声か、疑いようもなかった。あのキスを思い出せば。

どうしてキスに応じてしまったのだろう、とイリスは考えた。

青い影が彼の上に落ちかかり、熱い風と潮のにおいがしていた。

潮の気でやられてしまうので、庭の緑は自然に強いものばかりが植わっており、彼の立ち姿のように黒く、濃く、しなやかだった。彼が庭先にいるのは不思議と絵のように落ち着いてイリスの目に映る。いささか庭が狭い気もしたけれど。彼は、広大な緑の地をおおらかに歩んでいくのが似合いそうだ。

そんな風に彼を盗み見ていたことを、フラムは気付いていたのだろうか。頬が赤らむ。今時の小学生でもそんな内気な子は少ないだろうに。

力強かった彼の感触を思い出し、唇を噛み締めた。喉や胸が痛くなるくらい、怖いくらい圧倒的なキスだった。イリスの心の中の鍵のかけた箱を押し包み、その熱さで内側からこじ開けさせるような破壊的なところもあった……。全身が包み込まれたような気がして、それに身を委ねてしまふところだったと、イリスは危機感を抱いた。

やはり彼を雇うのは早まった判断だったのかもしれない。養母とは対照的で、地味で内気、慎重なイリスにしては、フラムを家に入れたことは、めずらしく思い切った判断だった。それはそれだけ従兄弟たちの存在が疎ましかったこともあるし、彼の存在であの強欲な二人がすっかり言葉をなくしていたところを見てしまったせいで、フラムに頼もしさを感じ、寄りかかろうとしているのだろう。それは自分の立ち方として望むものではない。守られる子どもでもありたくないし、寄りかからなければ立てない女でもいたくなかった。堂々と親戚たちに相對して、はつきりと物を言いたかったのだが……。

隣を歩くフラムに目を向けそうになり、意思の力で堪える。彼は見ていて飽きない。じつと座っているときでさえ、大きな獣がまどろんでいるような優雅さがあった。目を開くと理知的で美しい黒真珠の瞳がイリスを見る。その瞳が愛おしい自覚はある。まるで、豊かな深みに包まれているような思いがし、安堵と絶対の安心を、見出せる気がしたから。

別荘から少し離れた町中には、観光客を相手にする通りのほか、地元の人間しか知らないような、込み入った地区があった。外国人が足を踏み入れば、黒の中の白のようにくつきりと浮き上がってしまふような市場だ。ノイが朝食を集めてくるのはここからだ。香辛料、炒め物、古い油のにおいが満ち、漂ってくる湯気は少し生臭い。

イリスはノイに導かれて、香辛料の店に向かった。今自宅には、唐辛子と胡椒、ターメリックのストックがなかった。これがなくては今日の夕食のカレーが作れない。唐辛子はノイのリクエストだ。

赤いテントの下、濃い色の肌をした女性が立っている。トウイ人の眼差しは恐れがなかった。まっすぐに、どこか不機嫌そうにイリスを見てくる。早口のようなトウイ語がノイと店の者との間で飛び交うが、イリスはあまりはつきりと聞き取ることができないが、安くしてほしい、というようなことを言っているのは分かる。現にお金と交換で手渡された分量は多かったからだ。

「これでいいですか？」ノイが言うのに頷いた。

「？ありがとうございます？」イリスが簡単に駆使できる数少ないトウイ語の一つで彼女に一声掛けると、彼らの表情は無邪気にほころんだ。

「持ちます」とフラムが手を出したのに、一瞬硬直するものの、彼

に荷物を預け、今度はココナッツミルクを探して歩く。欲しいものすべてがそろうスーパーは、三人の足では少々遠かったため、ノイが飛び込んだ彼の馴染みの店でパックのものを二つ買った。

去り際、ノイが店主に呼び止められ、彼がそちらに行くと、差し出せと言われた手のひらにたくさんさんのキャンディーが握らされた。透明な包まれたひとつかみのキャンディーには、店主の朗らかな笑顔がついている。ノイはお礼を言って、手を振った。

店を出てさっそくそれを口に放り込んだノイは、歌いながら道を行く。壁に手を沿わせて、ぴたぴたと音を鳴らしながら。

「AはアップルパイのA、Bではくつとき、Cで切ったさ……」

「林檎の味だったの？」とイリスが笑いながら聞くと、ノイは笑顔で振り返り頷いた。こちらに駆けてきて、イリスとフラムに白い飴を一つずつ譲ってくれる。

子どものようにイリスもそれを放り込んで口の中で転がすと、砂糖の甘い味が口の中に広がった。ジンジャーが混じっているらしく、香りがいい。

「あれはあなたが教えたのですか？」とフラムが言った。

「あれ？……ああ、あの歌？」イリスは細い手足を動かして、わずかなステップを踏む少年を見た。あのくらいの年頃の子は、みんな素晴らしいダンサーの素質があるわ。「彼にイグレン語を教えるときに、いくつか歌ったの。それをすっかり覚えてしまったみたい」「ノイはいい教師を得ましたね。美しく歌う金糸雀に教わったのだから」

口説いているのか、それとも社交辞令なのか、微妙だったので聞き流すことにする。「それくらいしかしてあげられることはないから」ノイがいた三ヶ月はとても穏やかに過ぎていた。イリスはあの子が好きだ。大切にしてやりたいと思う。しかし、彼女にできることは本当に少なかった。学校にもやれない。

「あなたもとてもイグレン語が上手だけれど、どこで教わったの？」

「昔から聞いていたので覚えてしまいました。仕事にも役に立ちますし、あなたと意思疎通が容易で便利ですね」

「私もトウイ語をネイティブにしたいわ。ノイに少し教わっているけれど、私はいい生徒ではないから」

「金系雀のレッスンは楽しそうですね。私もお手伝いしましょう」

そう言つてフラムは笑つていたが、ふと前に目をやり急に顔色を変えた。イリスが彼の視線を辿ると、ノイの目の前に白人の二人組が立っているのを見つけ、彼女の顔色も変わった。青く。

お互いに駆け出し、フラムはノイの肩を引いて後ろに下げ、イリスはそのノイを庇った。唇を引き結んで、長身のルイとマイクと対峙していた少年の目には、彼らに踏みつぶされたキャンディーが映っている。

「大人げないと思わないの、ルイ、マイク」

「そいつがぶつかつてきたんだ。俺たちは悪くない」マイクは笑う。  
「コブ付きでデートか？ 遺産泥棒の次は奴隷と男の身請けか、イリス」

「彼らに失礼なことを言うなと言つたでしょう」震えるのは怒りのためだった。「彼は」

「私は彼女の夫です」

フラムがイリスの戸惑いが口をつく前に宣言した。「彼女を傷つけるなら容赦はしません」

「底辺労働者に何ができるつて言うんだ？」嫌な笑い方、頬をゆがめる笑い方でマイクはフラムに言う。挑発しているのは明らかだった。手を出せば喚き立てるつもりなのだ。

「イリス。いい加減目を覚ますんだ。お前は現地の男にだまされているだけだ。何せお前は」ルイの目がイリスの全身を値踏みする。

「若く、美しく、大金持ちの女なんだから」

服の下まで見透かされそうな目つきに、鳥肌が立つ。昔はティファニーがいた。従兄弟たちが家に来たときは、間違いがないように

油断なく目を光らせていた。でも今は。

「では、お望み通りの『証明』をすれば、納得していただけるのですか？」

激昂も感じられない静かな声に、全員が目がフラムに向いた。

「何がお望みですか。新聞に記事？ テレビで記者会見？ それとも、国王の前で誓えばいいでしょうか」フラムは微笑む。婉然と。

「そのくらいの伝手があります。さあ、選んでください」

ぽかんとしたのはユースア人のカナリー一族だけだったようだ。

ノイはぎゅっとイリスにしがみつき、励ますように目を輝かせている。

「あの……どういうこと？」

フラムはにつこりした。「仕事の関係ですよ。そういったものを、快く紹介してくれる方がいるのです」

そういうことが、と安堵の息を吐いた。何が安堵なのかもよくわからないが、疑問が解けたことは確かだ。しかし本当に彼がそれをしていないとは限らないことに思い当たり、慌てて彼を呼んだ。「フラム」だって、彼はイリスの嘘にキスまでするような人だ。

「いや、そんな……大仰なことじゃない」ルイは顎を引いていった。怯んでいる。フラムから発せられる猛禽や獣を前にした感覚にとらわれているらしい。「誰にもやましくないなら、そう言ってくればいいんだ。みんなの前で」

「婚約発表をしろと言うのですね、あなた方のお知り合いの前で」

イリスは目を丸くした。話がだんだん大きくなりつつある。テレビを使われたり、国王の前にひざまずくよりうんと小さいが。

「いい機会だ、一席設けよう。そこで二人が婚約したと言えればいい」自らの言葉に励まされたかのようにルイは腕を組み、人好きのする笑顔を浮かべた。「それで俺たちは満足する」

どうするの、とイリスはフラムの背中を見た。もう自分では收拾



が付けれられない。親戚たちと縁が切れるまでの仲を装い続けて、すべてが落ち着いたら別れる、そんなことできない。できるわけがないと気付いて、心臓をつかまれた気持ちになる。退路がない。始められてしまった関係は、結ばれるか別れるかの決着しかないのだ。だから始めないようにしてきたのに。

「分かりました」とフラムが応じたとき、顔を覆いそうになった。日程は後日連絡してくださいと言い、イリスとフラムを連れて彼らの脇を通り過ぎる。従兄弟たちの視線を、彼に抱かれた肩に感じ、イリスは身を震わせた。

道を抜けた先の周囲のざわめきのせいで、漂う沈黙はぎこちなくなつた。ここから戻る道を行けば、ますます沈黙は重く強くなるだろう。観念してイリスは口を開いた。

「あなたは私の夫じゃないわ」

「知っています」とフラムの返事は静かだった。凧いだ海のように「でも、将来そうなる可能性もある」

イリスは小さく笑った。私にその気がないのに、この人はどうするつもりなのだろう。

「将来なんて、私にはもうないのよ。キャリアを積むわけでもない。結婚する気もない。驚きで目は開きたくない。心臓の音を高めたくもない。ゆつくりと瞳を閉じていく、そのしばらくの間を乱されることなく生きていたいだけ。人生最高の時間は、もうとつくに終わったの」

「死ぬつもりなのですか？」

「人は、いつか死ぬわ」言った言葉は、思いがけず込み上げた。声が詰まり、裏返つたため、ごまかすようにもう一度言った。今度は自分を落ち着かせながら。「そう、いつか死んでしまう。死者は美しい輝きだけを私たちに投げかけて去っていく」

「誰を亡くしたのですか」

前に視線をやると、先を歩いていたノイが立ち止まり、イリスたちが追いつくのを待っていた。彼は彼女の隣に並ぶと、ワンピースの裾にまわりつくようにして、つかず離れずの距離をとった。そう、私はこの子にも話していなかったのだ。

「母よ。といつても実母は子どもの頃に亡くなっていて……少し前に亡くなったのは養母なんだけれど。彼女が残してくれた遺産のおかげで、私は穏やかなのか騒がしいのか分からない日々を送っているの」

「その方を愛していたのですね」フラムは言った。ノイがイリスの手を探して握る。「あなたにとって、お養母様は世界のすべてだった」

二人の異国の人に、声に、手に、イリスはこれまで覗き込めなかった己の悲しみの淵をようやく覗き込めた。それは思いがけず深く、冷たく、つらいものだ。乾ききって、底が見えなかった。けれど、もう泣くことのできる段階は過ぎていた。涙を流すには、イリスはもう疲れてきつていたのだ。

黙って、砂の道を歩くイリスに、寄り添うまではいかずとも、いつでも支えられるような距離でいたフラムは、やがて少し怒ったような声で言った。

「どうして何も言わないのです」感情が高ぶって、黒真珠の瞳は炎の中で輝くように、強い。

「あなたはすべてを受け止めて、荒れ狂うそれらを自分の胸に秘めて、自分が傷だらけになるのを黙って耐えるだけなのですか？」

イリスは首を振る。「そんな風に言わないで」

「ええ、言いません」フラムが感情を収める。しかし声にはまだくすぶりがある。「あなたはきっと気付いているでしょうから」

フラムに対して一瞬燃え上がった感情を、彼女はすぐに消しにかかった。すると、残ったのは倦怠感だけだった。彼の言うことは正論で、一般的に言うならイリスが間違っているだろう。それでも認

めてしまえば、イリスはこうして立つてはいられない。だから反論を口にする。弱々しくとも。

「もう疲れたのよ。気を張っても周囲とぶつかって傷つくだけ。だったら譲れないところに線を張って、ぎりぎりまで耐えることを選ぶわ」

本当は、そう言うことすら、イリスの望むところではない。彼女が望むのは平穏で、感情を高ぶらせたり、誰かに反論したりということは、それを邪魔する行動だったから。

「あなたを守る人は、誰もいなかったのですね」

言葉が突き刺さる。イリスは息を詰め、吐き出した。何も言えなかった。いたわ、いたけれど、もういない。ティファニーは主の身許へ返ったのだ。もうすっかり大きくなった養い子を一人にして。

「私がそうなのはいいけないのでしょうか？」フラムが言い、視線を下に落とした。「私たちが」

見ればノイがひたむきな目を向けてくる。「レディ、僕がいます。僕たちが」

「私にはあなたを受け止める用意がある」

イリスは大きく息を吸い込み、微笑んだ。けれど決して温かいだけのものではなく、悲しみをこまかす表情だということは、自分で気付いていた。笑うのは、ノイのためだ。彼の真剣さに報いたい。何も言えなかった、答えられなかったけれど、その思いだけは本物だった。

「あなたは大きくなって、自分が望むものを手に入れてくれればいいのよ、ノイ」

太陽が沈み、夜がやってくる。地上の別荘地の明かりが点在し、空の星の瞬きは、ユースアの星よりもずっとまばゆかった。藍色と暗色の狭間の海が沈黙に流れ込み、イリスは黙ってノイの手を引いた。

「??歌をうたえない鳥は、鳥ではないわ」

小鳥を箱に閉じ込めて鍵をかけた。その鍵の行方は知れない。箱の中の鳥が生きているのかも、歌えるのかも分からない。イリスは箱を両手に包んで、目を閉じ耳を塞いでいる。

これはすべて意味のないこと。

彼はとても綺麗だわ、と彼女は思った。夕闇の紫紺が、煙のように彼の輪郭をなぞっている。極上のベールのようで、なんて彼に似合うのだろう。美しい愛の男神はこんな姿をしているのかもしれない。それでも彼の今このときは有限で、決して彼女が損なわせてはいけないのだ。

だから最後に、イリスはフラムに言った。

「だから……私のことなんて、忘れてしまって」

忘れるだって？ フラムは苛々と砂を蹴った。美しい浜辺の白い砂は、彼女の肌触りを連想させる艶やかな光を秘めている。夜の中で輝く真珠やオパールのような光沢だ。

忘れるだと、寂しいくせに。怒りは治まらない。何故なら、彼女が買ってきた香辛料で鶏肉のカレーを作り、それを三人で食している間、彼は懸命に感情を抑え、彼女の望む態度を取り続けたからだ。彼女が目の前で怯えるように微笑んでいない今、取り繕う必要はない。

忘れると言うくらいなら、追い出せばいいのだ。なのにイリスはそれをしない。理由は簡単。自分からは言い出せないほど寂しいか、彼女自身気付いていない本心があるからだ。彼女とのキスで、フラムにはもう分かりすぎるほど分かっている彼女の本音は、イリスは彼を愛し始めているということだ。

どちらにしろ、従兄弟たちの前に出るときには、彼女には気付いてもらっていないてはならない。あの占術の予言が示す通りなら、イリス・カナリーは私の妻だ。出会うべくして出会った伴侶となる女性を、簡単に逃がすつもりはない。占術などきっかけにすぎないのだ。あの日、ああして出会ったことにこそ意味がある。

月の光がさざ波に反射して、道を作っていたあの夜。空を行く天女が初めて降り立ったような、駆けてくる水まじりの足音。月で染めたような金色の髪、彼女の瞳。彼女は彼を求めている。それは正確に言えば助けを求めているのだが、彼女が彼を求めて走ってきたように思うのは容易かった。そして、胸の中に閉じ込めたときの百合のような甘い香り。

彼女は自分に気付いていない。華やかに歩き、唇に微笑を浮かべれば、その影を秘めた姿に目を吸い寄せられる男は後を絶たないだ

ろうということを。そして、自分はそれにいかれた筆頭だということ。

フラムは海岸を辿り、だんだんと人気のない道を歩んでいた。距離を置いていくつかの邸の屋根が見えているが、この辺りでは、それらの住人は皆、車を使った。だから彼の足跡が残されていくのは邸をうかがう不審者の痕跡のようで少々不気味なようにも思える。しかし、彼は歩くのが嫌いではなかった。自分の足で街を歩き、変化を楽しむことを好んだし、幼少期からよく歩き回ったおかげで、簡単には手に入れないつながりも得られた。邸の、エアコンの効いた部屋で、キーボードを叩く以外のことで手に入れられるものは計り知れないほど多いというのが持論だ。もちろん、両方できて損はない。

インターホンを押せば、カメラが彼の姿を捉え、自動ロックが解除される。扉を開ければ、迎えがあつた。

「?おかえりなさいませ?」

「?ただいま、スウ?」

「?カンル様から定例報告が届いております?」

真面目で穏やかな後見人、愛すべきカンル叔父を思い浮かべ、頷く。スウは「?それから?」とフラムの後に続きながら、生真面目に報告した。

「?父上様からお手紙が?」

フラムは歩みを止めた。「?手紙だけか??」と聞けば、否定が返ってきた。

「?いいえ。日中に何度かお電話がございました?」

当然だ。彼は気まぐれで、連絡を取りたいときに連絡が取れないと、飽きるまでしつこいのだ。家を空けていてよかったな、と笑った顔はおそらく非情だろう。フラムには、父に対する愛情はない。あんな、夫の役目も父の役目もしない男など。

「?どうせ、私の見合いの話か、新しい恋人の自慢だろう。しばらく

く取り次ぐな？」

スウは頭を足れた。自室に入ると、着替えが用意されている。ごく普通の、ありふれた既製品の衣装を脱ぎながら、思ったことがあった。

もし婚約を披露するなら、準備が必要だ。

「？スウ。最近流行のブランドといったらどこだ、特にドレスの？」

「？ガシュー、ディアは定番ですが、面白みがないと言ったらそうでございますね。年齢にもよりますが、若い女性にならイル・マリネンでしょうか？」

「？わかった、ありがとう？」フラムは電話を取り、番号録に書き留めてある『イル・マリネン』の女性デザイナーの番号をプッシュした。イグレン語で簡単に挨拶をすると、彼女はこちらを覚えていた。

『まあ、ミスター！ お久しぶりです。電話をくださって嬉しいわ。どうなさいましたの？』

「お久しぶりです。無精をして申し訳ない。あなたのドレスのことを思い出して電話をしたんです。お仕事は順調ですか？」

肩をすくめたような笑い声。『以前ご報告した通りですわ。店内の派閥争いがひどすぎて、杭が出たら打たれるという状況です。この調子なら店を辞めようかと思っています』

うまい状況だ。フラムはにっこりした。

「だったら、エレン。あなたは自分の腕を振るう場が欲しいと言っていましたよね？ 大きな会ではなくて恐縮なのですが、ユースア人女性に似合うドレスを一着頼みたいと思っています。時間もありませんのですよ。あなたの腕を見込んでお願いしたいのです」

『まあ、本当ですか！？』電話の向こうの声が、一段高くなる。受話器を持ち替え、フラムは笑った。

『お相手はどんな方なんです？ ああ、結構ですわ、自分で見て確かめますから！ 早速明日伺ってもよろしいでしょうか？』

「ええ。モデルはとても綺麗な方ですよ。早ければ早いほど助かり

ます。その際、お願いがもう一つあるのですが」

「なんでしょう？　と彼女の声は子どもじみた興奮を帯びた。」

「彼女は私の素性を知らないのです。ですから、私がトウニランだということは内密に願います」

少し間があつた。『……それは……どういふ方ですか？　少なくとも社交がお得意な方ではありませんよね？　まさか、トウニ屈指の資産家一族トウニランの名をご存知ないというのは……』声に堂々と困惑があり、彼はくすくすと笑つた。

「会えば分かりますよ」

トウニラン・フリーラムは部屋を見回した。世界中から集めた書物、古書の類いが、深い色味で壁一面を覆っている。アンティークのランプがほの明るいオレンジの光を投げかけ、天井からつり下がる照明、テーブルランプ、スタンドライトのランプシェードは、すべてオレンジで統一してあつた。ソファは黒の革、彼の残しかけている椅子は普段使うもので、ゆったりとしたラウンジチェアだつた。この部屋はエイジアンリゾートをイメージしたもので統一してあるが、イグレンシア風の部屋もある。イリス・カナリーの住まいより広いことを、彼はもう知っていた。部屋だけが多いのだ。すべて、彼の持ち物である。海岸から突き出した岬の上に立つ邸は、彼の別荘だつた。

素性の知れない男が、実はトウイの長者であることを知つたら、彼女はとうするだろうか。考え、微笑み、打ち消した。何故なら、しばらく明かす気はなかつたので。

彼女には一度こちらに立ち寄るよう伝えて、電話を切つた。いつの間にかお茶の用意を整えたスウが言つた。

「？　明日わたくしは本宅に参りたいと存じます？」

「？　何かトラブルか？？」



すると、初老の執事は目をきらりと光らせた。

「？フー・ラム様は大事なことをお忘れです。パーティーにお出になるなら、あなた様の身なりも整えねばなりません。でなければ、お相手の女性に恥をかかせることになりますぞ？」

爺やの剣幕に、彼は両手を上げて降参した。

少し遅くなる、という連絡を、イリスはフラムから聞いていた。彼が帰ったすぐ後で電話が鳴り、明日は行くのが少し遅くなると言ってきたのだ。この数日で彼がよく手伝ってくれるため、急ぎの仕事もなかったのです承した。

彼には休息が必要だわ、そして、私にも。

お互いの立ち位置が微妙に変わりつつある今、イリスはルイたちの手前引くこともできなかったし、自ら前になど当然行けなかった。しかし、これから彼女たちはこの関係に名前を付けなければならなかった。彼はイリスを相手に選ばうとしている。

トウイの夜は決して寒くはないはずなのに、知らず知らずのうちに二の腕をさすっていた。宣言してしまえば、イリスは彼から逃げられない。肩に触れ、唇に触れた彼を求めて、身体は冷えて訴えている。彼に抱きしめられたい。彼に委ねたい。

でも、それだけはだめだわ……。

息で呟き、顔を覆った。それだけはしてはいけない。理由は馬鹿馬鹿しいくらいのことだ。

イリスは、手に入れる前に失うことを恐れている。時が、人生が、喜びの光で輝けば輝くほど、それが失われていくときが恐ろしい。

身を切られるような思いをして一人になるくらいなら、もう最初から一人でいようと決めた。ティファニーがいなくなったことはイリスに多大なダメージを与えたが、その後に巻き起こった遺産を巡る問題にも、彼女は彼女自身の心を傷つけられていた。そんな風に、周囲にも自分にも絶望することに疲れてしまったのだ。

しかし分かってもいた。それでもなお自分を愛してくれる誰かを求める浅ましい気持ちがあることを。拒絶を越えて強引に抱きしめ

てくることを望んでいるのだ。これを最低と言わずに何と云うだろう？

朝が訪れ、目覚めても、いずれ来るときが近付くだけで、イリスの心は晴れなかった。時間だけが減っていく。自分の心もすり減っていきそうなほど疲れており、イリスは初めて朝食を残した。

「レディ、今日の食事は口に合いませんでしたか？」

「違うのよ、ちょっと体調が悪いだけ……」額を押さえ、微笑んで首を振るが、どうしても頭痛のような鈍い痛みがある。すると、ノイはぎゅうぎゅうとイリスの腰を押した。

「片付けなら僕がしますから！ 部屋に行って休んでいてください」  
「でも」と反論を口にしようとする、泣きそうな顔をされてしまう。「じゃあ、お願いできる？」と観念すると、一転してにつこりされた。なかなか演技派のようだ。

部屋に行って目を閉じる。開けた窓から、潮風が入り込んでカーテンを揺らした。疲れているとは感じなかったのに、包み込むような眠気がやってくる。目を閉じれば、ゆっくりとその波に引き込まれていく……。

はっと気付いたとき、彼女の側には黒い瞳の男性の姿があった。イリスは睨んだ。

「女性の部屋に入り込むのがあなたのマナーなの？」

「失礼しました」と彼は引き下がる言葉を口にしたが、右腕を頭の上に挙げ、寝そべったイリスの上にかがみ込んだまま動こうとはしなかった。

「フラム」

「眠れる姫君はご機嫌斜めようですね」フラムが浮かべた微笑にはからかいの色がある。「体調が悪いと聞きました」

あなたが原因なのよとは言えない。疲れた息を吐いて横を向いた。

あらわになつた首筋に、彼の指先が触れて目を剥く。身をよじり、また視線を鋭くしたが、フラムは意に介さず、笑みを浮かべているがどこか真剣な表情で顎の下から鎖骨までを辿っていく。その手が熱く、漏らすまいとした息は、細く、震えて、吐き出された。

「フラム……」

「静かに」と彼は息をひそめる。「脈を診ているので」

鎖骨のくぼみや下の部分を辿っていた手は、ゆっくりと首に戻り、柔らかくイリスの顎を捕らえるようにした。行きつ戻りつする手の平、指先。耳元に触れられるとぞくりとする。

（嘘つき……）脈を診るなんて嘘に決まっていた。医者 of 真似事をするならこんな風に触れたりはしない。静かに、とまた彼はささやいた。捉えられた顎から頬を支えられ、仰向けさせられる。

「目が潤んでいる」フラムは冷徹にも思えるくらいの口調で言った。「熱があるのですか？」

こんな風にしておいて、と唇を噛むと、親指がそれをとどめた。ほとんど手入れできていないイリスの唇を、指のほんのわずかな先でいじっている。どうしてだろう、不思議と安らぎがあった。心地よく身を委ねてしまいそう。ずっとこのままでいたいと思わせるような。彼女はここに来て初めて誰かに身を任せていた。そしてそれは、彼女が願望していた平穏を持っていた。

抵抗しなさい、とイリスは眠りにも似た心地よさの中で自分を叱咤する。流されてはいけない。後先考えず、今このときだけ与えられる熱に踊らされてはいけないのだ。イリスはトウイの人間ではないし、フラムは恋人ではなく、この先も恋人にするつもりはない。この行為の許容は彼の期待を無駄に煽ってしまうものだ。妖婦になったつもりもなければ、はけ口にしたいわけでもないイリスは、しかし触れるだけの手のひらの翻弄され、もう一度わずかな抵抗を再び試みた。

「……フラム……」

それは、応じる声に似ていた。望む声にも。フラムの笑みが、獐

猛さを帯びた。

「イリス」

途端、何かが香った。煙のような、花のような。時間の止まった花を思わせる香りだった。

その時、下階で派手な音が響いた。何かをひっくり返したような音だ。わずかに悲鳴が聞こえた気がする。

二人の動きが止まる。イリスは瞬きをし、フラムはがっくり頭を垂れて、何事かを低い声で呟いた。

「?ちくしょう、せつかくいいところだったのに?」

「え? なんて言った?」

「……なんでもありません」まだ怒りのようなものを漂わせて、彼は起き上がった。

「ノイの声がしたわ。……誰か別の人の声も」同じくイリスも起き上がり、服装や髪の流れを直しながら尋ねる。

「私の友人です。あなたの準備のために連れてきたのですが」

「準備って、何の?」

「パーティに行くのにドレスが必要でしょう?」なんてことはないとフラムは肩をすくめた。「せつかくですから、新しく作ってもらおうと思ったのですよ」

イリスはまだ理解できていなかった。自分とドレスがうまく結びつかなかったのだ。しかしゆっくりとつなが合わされていく単語に、「あなたと行かなければならないパーティの?」と尋ねる姿はおどおどしてしまった。

「せつかくですから」ともう一度フラムは根気よく言った。

「これはいい機会です。ドレスがあれば、外に出て行く気になるでしょう?」

「そういう問題じゃなくて」イリスは言う。だが、下が気になって仕方がない。追求を諦め、ベッドから立ち上がった。すっかり日差しが強く明るく、部屋が暑くなっている。「とにかく、下を見てこ

なきや」

急ぎ足で下に向かうと、消毒液のにおいが鼻を突いた。困惑しつつ覗いたリビングに、見知らぬ女性の姿がある。金色の髪を短くした、赤い唇の華やかな女性だった。ノイとともに床に散らばったものの救急箱の中身を片付けていた彼女は、こちらを見てぱっと顔を輝かせた。喜ばれる理由が分からなくて、イリスには当惑の念がわき起こる。

「お邪魔しています、ミス……」

「イリスです。フラムのお友達だそうですね。出迎えなくてごめんなさい」

「いいえ！」と彼女は明るく言って、イリスの差し出した手をとった。「エレン・ジョーダンです。フー・ラム氏の数多い友人の一人に加えていただいています。こちらこそ、勝手に入り込んで申し訳ありません。とてもいいお宅ですね。庭の緑と室内のシックな色合いがとても素敵」

顔が輝いてしまうのが抑えられなかった。歓迎の表情を表すことができたのは、この別荘は、イリスの最後の仕事のようなものだったからだ。「本当にそう思ってください？ 三ヶ月間ですべて整えたの」

エレンはにつこりした。「とても腕利きなんですのね。それにとっても悪戯心がありみたい」

何を言われたのか分からないでいると、ノイが両手で何かを差し出した。バネ仕掛けのおもちゃに見える。

「薬箱を開けたら飛び出してきたんです」

言われて、記憶が蘇った。これはイリスのものだ。何十年も前の少女の彼女のお気に入りのひとつだった。

「なくしたと思っていたわ。子どもの頃に遊んでいたおもちゃ」ノイから受け取って、イリスは苦笑した。「ティファニーが隠していたのね。そういえば、救急箱の中身は見ても、薬箱の中身は見てい

なかった」

それで、ノイは救急箱を落として消毒液をこぼしてしまっただけだった。バネの先のキャラクターが、何かメモを挟んでいる。イリスは笑いを堪えて読み上げた。

「『落ち着いて!』」

くす、とフラムが笑い、イリスも笑った。ノイもエレンも笑い出す。何十年越しに仕掛けた悪戯が発動するなんて、ティファニーらしかった。

「楽しいお家ですわね」とエレンはくすくすと笑っている。「センスがあるわ。これなら、無茶な注文を受け付けられずに済みそう」

目を瞬かせると、彼女は名刺を取り出した。ゴシックな字体で彼女の名前と肩書きがある。デザイナー。所属は「イル・マリネン」……「呟いて、はっとした。イル・マリネン。ユースアに本店があるフォーマルファッションブランドの名前だ。イル・マリネンのデザイナーがどうしてフラムと知り合いなのだろう？」

「仕事の関係です」思わず見つめた先で彼は首を傾けて言った。「以前勤めた仕事先で知り合ったのですよ」

「あなたの今までの仕事って、いったい？」強気に出られたり、言葉が出来たり、彼には不審なところが多すぎた。

「いろいろ、ですね。観光、土木とか建築、服飾もやったかな。多すぎて覚えていません」

変なひと、とイリスは納得しきれないまま腕を組んで彼を見上げた。

「あなたってやっぱり不思議だね。でも、あなたはそれでいいという気がする」

何も言っていないのにすべてを知っているような。何をするのでなくそこにいて、いつまでも待っていてくれるような。そういう不思議な気配が彼にはある。

「人徳ですわね、ミスター」

そう言ったエレンはにこやかにイリスを見た。「フー・ラム氏がめずらしく電話をかけてくるので、いったいどんな方にドレスを着せるのかと思ったけれど、あなたが相手なら、私も腕が鳴るわ」

「イル・マリネンのドレスは、私も何度か見たことがあります。母が何着か持っていて」イリスの声はか細く、しかし興奮で震えていた。「友人たちもそちらのドレスを持っているだけで自慢していたわ。そんなすごいブランドのドレスなんて、私……」

「そんなに緊張なならないで。私、下っ端なんです」エレンは肩をすくめた。スーツでかつちり着込んでいる姿にその仕草は、とても愛嬌にあふれて見える。「むしろ気を張らなくちゃならないのは私の方。あなたのドレスで、私、主要デザイナーにのし上がるつもりなんですから」

イリスはちよつと笑った。どこのブランドも同じらしい。イリスが以前勤めていたインテリアブランドは、皆誰しも自分のカラーを持っていて、それを花開かせようと必死だった。自分はそこまで主張するほどのものは持てていなかったけれど。だからエレンには親近感を覚えた。はきはきとしたしゃべり方と言い、裏表のなさそうな笑顔といい、新鮮な風を吹き込むような人だと好感も持つ。

ノイが救急箱から取り出した頭痛薬を差し出してきた。さきほどの音は、それを取ろうと手を滑らせた音らしかった。

さつそくエレンは仕事を始めた。彼女は他のスタッフを連れてはいなかった。自らの手でイリスの全身を手早く、慣れた手つきで採寸すると、それをノートに書き留めて、唇をひねってうなっている。ノートには色鉛筆で書き込んだ文字がカラフルに散っており、彼女の豊かな想像力を示すようだった。

「スレンダーなタイプがいいわ。裾もあまり派手にしないで……何かご要望はありますか？」

「あまり派手な色は得意じゃないんですけれど……あの……私、イル・マリネンの黒が好きなんです」



エレンの目がきらりと光る。イル・マリネンのフォーマルブラックは、その名前だけで一部の人をひれ伏させる効果がある。でも、とイリスは微笑んだ。

「でも、カラードレスを作ってほしいと思うわ。イル・マリネンの黒じゃなく、例えばイル・マリネンの赤、青、薔薇色と言われるような」

「イル・マリネンのカラードレス……」じつと視線を落として考え込んでいたエレンは、はっと天啓を受けたように顔を上げ、何かを素早く書き込んだ。にやりとした顔でイリスを見て、「氏は？」とフラムに顔を向ける。

「彼女に似合うようにしてください」

「もちろんですわ。任せてください。ミス・イリス。あなたにふさわしいドレスを作ってみせるわ」

「僕にも聞いてください」と離れたところで座っていたノイがやってきた。エレンは笑顔を浮かべる。

「あなたはと思う？」

「イリスには白か青がいいです」ノイは笑顔で答えた。

目を瞬かせるイリスとフラムだったが、エレンは笑顔だった。「私たち、気が合うわね」ノートをたたんで、彼女は言う。「いくつか色の案を出してみます。でも、私の中ではこれというものがあるから。きつとお似合いだわ」

「お願いします。……夢じゃないのかしら」イル・マリネンのドレス。着て出て行かないともつたいない一着になつてしまふ。すると、あまりにも目を輝かせていたからかもしれない、フラムがくすくすと喉を鳴らした。

「言ったでしょう？ 外に出たくなると」

「認めなくちゃいけないみたいだわ」イリスは澄まして言ったが、やはりくすぐったくなって笑ってしまった。例えそれを着ていく場所が望んだところでなくとも、あこがれのドレスを身にまとう自分には心が躍った。

「あまり時間はかけられないとうかがっています。もしかしたらこちらに作業を一任していただくかもしれないのですけれど、よろしいでしょうか？」

「それはもちろん」イリスはため息をついた。「きつと素敵なものができあがると信じているもの」

エレンはにつこりした。そして仕事に取りかかるべく、ノイのお茶に手を付けることなく、ここを後にすることになった。玄関まで三人で見送り、フラムとエレンは友人の抱擁を交わす。

「？支払いは私に？」「？存じておりますわ？」二人は笑顔で、イリスには意味の取れないトウイ語で親しく言葉を交わした。

「また後日お会いしましょう、ミス・イリス」

「楽しみにしています、エレン」イリスもまた抱擁し、車に乗り込んだ彼女を見送った。

「お茶、飲んでもらえませんでした……」

「今度お菓子と一緒に飲んでいただきましょう？　でも、今は私に入れてね」

笑顔でキッチンに向かうノイの背中を見ていて、不意に、隣に立っていたフラムも同じ瞳をしているのを目撃し、密かに笑った。しかしそんな笑い方はすぐに気付かれてしまう。フラムは緩く瞬いた。「あなた今、あなたが言ってくれた私の視線と、同じ目をしていたと思うわ。……父親か兄のよう」

フラムは一瞬表情をなくした。怖いくらい衝撃を受けた顔で、口元を押さえた手は思わずといった印象がある。まるで彼の素の表情を見た気がして、イリスの方が目を丸くしてしまった。

「私、何か悪いことを言った？」

「いえ……」彼は夢から覚めたように瞬く。視線をそらし、小さな声で「なんでもありません」と呟いた。イリスは憤然とした。そんな顔をすれば、何でもないことはないくらい分かるわ。

父親か兄に、何か思うところでもあるのだろうか。彼の家族の話は聞いたことがない。そもそも、彼はあまり自分の話をしなかった。穏やかに風いだ感情面はイリスの憧れにもなるような静けさだったが、それは、線を引いた境界の向こう側、閉ざされた彼の内面でもあるらしい。そのことによりやく思い当たった。彼は、自分のことをまるで明かしていない。

二人の間にはそれぞれ物思う無言の時間が流れた。彼はゆっくりと目を伏せた。子どもがうなだれるようだった。しかし次の瞬間には大きく息を吐き出し、胸を張っている。影を振り払った、自信にあふれ、穏やかな物腰の、いつもの彼に戻っていた。

「少し疲れましたね。お茶を飲みましょう」

話す気はないのね、とイリスは腕を組んだ。思ったが、言い出しなかった。踏み込めるほどイリスは強くはなかったし、彼の脆いところを見た気がして怖かった。だからおとなしく頷いた。

ルイ・カナリーとマイク・カナリーから贈られてきたパーティの招待状の日付は、一ヶ月後を示していた。場所はマクレガー家。トウインラン一族とも付き合いがあるマクレガー家を指定しているのは作為的なのか偶然なのかを考えたが、イリスは特にコメントしていなかったから、おそらくあの兄弟が知り合いなのだろう。

一ヶ月という期間は、ドレスを仕上げるのには少々厳しいかもしれないが、倒れるほど無理な時間でもない。エレンは優秀なデザイナーだった。人の使い方も心得ていたし、仕事の効率的なやり方を身体に叩き込んだ人間だ。彼女なら、きっと素晴らしいドレスを仕立ててくれるはずだ。

フラムはそう思っただ笑ったが、思案の種はイリスの心のことだった。彼女はドレスを作ることに賛成した、だが、彼を婚約者にすることにまだ迷いがある。

一手が必要なのだ、彼を愛していると自覚するような……。

必要なのはムードだ。トウイの夜、暖かい風と潮鳴り、そして花の香りは心をくすぐるのに十分な要素のはず。実際、彼女は彼の思うままに触れられていた。あのまま、フラムの右手は彼女の素肌をたつぷり味わうことができたはずだった。滑らかで、少し汗ばんだまわりつくような白い肌の感触をフラムは思い出し、唇で触れてみたいということまで想像は及んだ。だが焦りは禁物だ。何重にも包まれた花びらをはいでいくように、イリスの心に触れたかった。彼女の数多くの面に触れるたび、どんな強い芯と熱い心を秘めているのか想像するのが楽しかった。誰にも心に入れたくないと怯えているくせに、誰かを欲し、しかし他人のために怒るようなところ。彼女はアンバランスで、だからこそ愛おしかった。

フラムはブランデーを傾け、そつと息を吐いた。イリスに必要なのはしっかりとした支えだ。感情を吐露できる、すべてをさらけ出せる大きな海のような。

彼は壁にかかった写真を見上げた。弟が撮った、トウインランのプライベートビーチの写真だ。幼い頃、家族で過ごした島を捉えている。写真は弟の子供心が透かして見えるような光彩で美しく、昔はあのようにあの島を見ていたのかとフラムの心は静まり、じきにふつつと煮えた。

母と彼ら兄弟を島にやるのは、家族の恒例行事だった。父はいなかった。仕事が忙しいからと、何らかのプレゼントを送りつけてくるくらいで、島に現れることは滅多になかった。この行事が、父が外で遊ぶための期間だと気付いたのはずいぶん早かった気がする。フラム自身、仕事に興味を持ち始めていく内に、父の行動の奇妙さに気付いたのだ。母は知っていたが何も言わなかった。何も言わずに死んでいった。

彼女は息子が、父親を軽蔑していることに気付いていただろう。「許してさしあげて」と言った悲しい目を覚えている、そんな目をさせた父親への憎しみとともに。

写真を睨んでいたことに気付いたフラムは、酔った息を吐き出すことでそれを鎮めた。感情を抑えることは得意だった。世を渡っていくのには必要な技術だ。トウイに根ざすトウインラン一族において、彼の能力は突出していた。その技術も、仕事の能力でも。父親から少しずつ実権を取り上げているが、近い将来一族を背負わなければならぬことにプレッシャーを感じないはずはない。だからこそ必要だった。彼もまた、安堵とともに抱きしめて抱きしめられるようなパートナーを必要としていたのだ。

過去はともあれ。フラムはグラスをはじいた。あの島を使うのはいいかもしれない。環境の変化は不可欠だ、変わるためには。今の

ままでも二人になる時間はないこともないが、イリスは自分に向き合うべきだし、彼と向き合うべきだ。

一ヶ月後、二人は人々の前で婚約を発表しなければならない。それをひととき限りの嘘にするつもりは毛頭なかった。

電話を取り上げ、内線でスウに指示をする。

「？島を使おうと思う。準備をしてくれるか？それから、トゥンイランの名前で招待状を。招待者は、イリス・カナリーだ？」

フラムはイリスに招待状を差し出した。ルイから贈られてきたそれを同じ気持ちで、何気なくそれを受け取り、イリスは首を傾ける。印字されたイグレン語で、あなたを招待するとある。……どこに？文面を辿り、差出人を見ると見知らぬ名前がある。トゥイ語は読めないが、併記されているイグレン語で読み取るのは可能だった。「トゥンイラン……どなた？」発音知られぬ名前に困惑を浮かべると、横から飛んできたのはノイだった。

「トゥイの大資産家ですよ、レディ！宝石と服飾で一財を築き上げた、古い家系の方です」

「そのトゥンイラン氏が、リゾートに招待する、とあるけれど……」  
「すごいじゃないですか！」

興奮のあまり、彼の顔は真っ赤になっている。同意を求めるようにフラムを見上げ、イリスもまたフラムを見た。しかしどうしても疑問ばかりが表れてしまう。

「どうしてあなたがこれを？」

「トゥンイラン氏にあなたのことを話したところ、私たち三人を招待すると言ったのです」

トウイの資産家がどの程度なのか、トゥンイラン氏がどんな人物なのか想像もつかないイリスは、どうしても素直に喜ぶことはできなかった。突然遺産を受け継いだときと似た不安がある。

「変化が必要です、あなたの生活には」フラムは言った。諭すように。「何も考えないだけの時間を過ごしなさい、というトゥンイラン氏の配慮です。私が案内を仰せつかったので、安心してください」

「そんな、会ったこともない方のご招待を受けるわけには……」  
「彼は十分にあなたのことを知っています。そして、これから知りたいと思っています」

まるで見初められたみたいな言い方、とイリスは唇を曲げた。家からろくに出的こともない人間に、誰かが恋情を抱くとは思えない。それともよっぽど地味な女がお好きなのかしら。資産家というなら美しい女性たちと知り合う機会がたくさんあるだろうに、これは物好きが始めた奇特な遊びにしか思えない。

「困ったわ」

うまい断りの文句が出てこない。

「受けてしまえば断る必要はありませんよ」誘惑するような声でフラムは笑った。「何がそんなに気がかりなのですか？」

「見知らぬ方のお誘いだということ」イリスはもう一度招待状をめくった。「そして、あなたがこれを持ってきたということ」

「仕事の関係ですよ」フラムは何も不思議はないと言う。

「ええきつとそうでしょうね。この方の伝手でイル・マリネンのエレンとつながりがあったんでしょうし」エレンの名前を出したことで思い出す。「そうよ、ドレスのことがあるわ」

「必要ならばエレンには島に来てもらうことにしましょう」こともなげに彼は言った。

「パーティがあるわ」イリスは顎を引いて別の手を繰り出す。

「一ヶ月後でしょう？ その間に島を使えばいい」

「どうしてそんなにリゾートに行かせたがるの？」

「どうしてそんなにリゾートに行きたくないんです？」フラムは面白そうに目を光らせ、イリスを見た。「あなたには時間が必要です。自分を見つめ、私を見る時間が」

「フラム。ノイの前よ」うなるような低い声でイリスは彼を睨みつけた。

しかし彼は意に介さない。そのノイに笑った目を向けた。  
「君も旅行に行きたいとは思いませんか。イリスと一緒に」

ノイの目はおどおどしていた。頭のいい彼は言っではいけないことと本心に板挟みになっているのだ。

イリスは降参した。額を押さえ、苦笑する。

「子どもに嘘をつかせる趣味はないわ」大きくついたため息は決意を固めるためのもの。「分かったわ、招待を受けましょう」

「やった！」とノイが両手を挙げた。フラムも喜びの表情を見せる。イリスはしかし念を押すことも忘れなかった。

「でも招待を受けるのは二週間よ。それ以上お邪魔するつもりはないということ伝えてもらえる？ さすがに一ヶ月はご迷惑だと思うの」

「気にしないと思いますが」

「それでもよ。私にはお返しできるものが何もないもの。でも何かお礼を考えなくちゃね」

フラムはただ微笑んだ。彼の喜ぶものについてアドバイスをくれてもいいのにそれをしない。ただ、トウイの島を持っているような資産家のトウインラン氏に喜ばれるお礼の品は、十分すぎるほど分かっている顔だった。



風を受け、イリスは息を吸い込み、目を細めた。

海も風も文句のつけほどのないくらい良好で、空は鮮やかに晴れ、太陽は焦げ付くくらい熱い。エンジン音が足下を揺らし、イリスは遠ざかっていく陸地に眺めているノイを、それ以上身を乗り出さないように見守っていた。白く光る粒になる波を、少年は嬉しそうに眺めている。魚が跳ねたと言っては、イリスに愛おしさばかりを呼び起こす無邪気な顔で振り向いた。

「その帽子、初めて見ます。とてもよく似合ってます」何度目かの振り向きで彼は言い、イリスは大きなつばをはためかせながらくすくす笑った。

「ありがとう。あなたも新しい帽子、とてもよく似合ってるわ。まるでイグレンシアの紳士みたい」

トゥンイランのプライベートリゾートへの招待を受けることになったため、イリスはノイに、いっどんな身分の人間と会っても恥ずかしくないよう、服飾の一揃えをプレゼントしていた。今、トゥイ人の少年は白いブラウスに身体に見合った小さなベストを着て、貴族の令息のような格好をしている。一昔前なら、イグレンシアとの貿易で財を成した家のお坊ちゃんの間違えられるだろう。

「何が見えるの？」

「島が」ノイは弾んだ声で言って指で示した。「まるで亀みたいですね！」

後ろを見ていたかと思えば今度は舳先へ身を乗りだしと忙しい。緑色の小さな島が行く手に見え、イリスは感嘆のため息をついた。青すぎる空に豊かな緑の島は、宝石の中にベルベットを広げたような美しさがあった。

新しいところへ行くことは勇気があるものだ。ティファニーを亡くして、ユースアからトゥイへ、トゥイの中でも見知らぬ資産家が

所有している島へ。一人だったのに二人に、いつの間にか三人だけで過ごしている。半年も経たないうちに、イリスの環境はめまぐるしく変わっていた。休まる 때가ほとんどない気がする。

「マティス島です」操舵席からフラムの大きな声が響いたとき、イリスの鼓動は高鳴った。彼のそんな張り上げた声を初めて聞く。いつももの静かに低く話すため、大声は少しかすれて艶があつた。

私は決めなければならない。フラムとの関係を、距離を。恋人や、婚約者、他人といった適切な名前を与えなければならない世界にままならぬものを覚えたが、堪える。あの島で、イリスは自分を見つめなければならないのだ。

トゥンイラン専用の港には、他に二隻のボートが泊まっていた。

氏の持ち物なのだろう。もしかしたら本人が来ているのかしら、と考え、イリスは緊張でこわばったが一方で胸を撫で下ろした。服装を整えてきてよかった。今日イリスは黒のセミフォーマルなワンピースを着ていた。船には礼装から普段着まで幅広く取り揃えた荷物が積んである。決して外に出られないことはないのだが、不便なのは確かなので大荷物になっていた。彼女は自分の荷物が少なくなった人間だったけれど。

港には海の上の船の他に、陸の上に大きなワゴンが停まっていた。側に立っているのは浅黒い肌に白髪を撫で付けた初老の男性で、この暑いのにスーツ姿で微動だにしていない。

「ようこそ、マティス島へ」イリスとノイが近付くと、しかし彼はにこやかに、深みのある声で歓迎を示した。「ミス・カナリーとノイ君ですね。トゥンイランからお世話を申しつかりました、スウと申します」

「初めまして、ミスター・スウ。イリスと呼んでください」握手をしながらイリスはやはり聞かずにはいられなかった。「トゥンイラ

ン氏のご好意に甘えてしまつてすみません。ご迷惑だったのではないでしょうか」

「いいえ。こちらこそ突然のお申し出がご迷惑でなかったことを祈るばかりです。トゥンイランは、これと決めたら絶対に譲らないところがあるので」

主に対しては親しみがにじむ口調だ。きっと長く氏の側にいるのだろう。得体の知れなかった人物が、人に嫌われるような性格をしていないらしいことに不思議と安堵するイリスだ。

「余計なことを言っていますか、スウ」船を繋いでフラムがやってきた。

「いいえ。普段通りですよ」スウは笑顔で応じた。

「イリス、彼の言うことはあまり真に受けてはいけませんよ。トゥンイランをいじめるのが生き甲斐というような人なんですから」

「トゥンイランだけにですよ」

「？だからそう言っているじゃないか？」

「？困りたくなければ大人しくなさることですね？」

「二人とも、荷物を運ばなくていいんですか？」ノイが言い、二人は笑顔で彼を振り返った。イリスはそれを手伝いながら、フラムに言った。

「スウさんとは昔からの付き合いなのね」

フラムはびっくりしたように目を見開いた。「どうしてそう思うのです？」

「敢えて言うなら、空気、かしら。少なくとも、お互いのことを尊敬しているし、信頼しているでしょう？」

イリスがスーツケースを下ろそうとするとそれを押しとどめたのはスウだった。「お持ちします」とにつこり笑ったかと思うと、軽々ケースを持ち上げて行ってしまう。いかにも老執事といった容貌に反して、隆々とした力強さに、イリスは面食らってしまった。

フラムは、くす、と笑い声を漏らした。

「頭が上がらないんです」

「ねっ、でっ」

スウの運転で、三人は島の中心部へと向かった。この島は、大きな森を中央に抱いており、北側は絶壁で、西から南、南から東に向けて海岸になつていているという。東西に長く、見事にノイの指摘した通り亀の形をしているのだ。

豊かな森の中には、白い宮殿のような建物が隠されていた。この建物のために森があるのではないかというまぶしいくらいの輝きを放ち、グラキア建築の神殿を思わせる古風さと荘厳さ、しかし近代建築の洒落つ気がある。

荷物を下ろそうとすると、スウに止められた。「どうぞ、三人で中へ」と言い、フラムに導かれ足を踏み入れる。

中は建物と同じ白い光に満ちていた。採光が緻密に設計されており、真昼はライトなど無粋と言わんばかりに明るい。本当に神殿みたい、とイリスはため息をこぼした。カーペットの豪華な文様が、天に浮かんでいきそうなこの場所を現実に取り止めている。

「中庭もあるですよ」フラムは見知った場所のように優雅に彼女を先導した。イリスはその小さな庭を見て息を呑んだ。噴水があり、白いベンチがあつた。まるで、天使が水浴に来そうなところ。

「宮殿だわ」最初に抱いた感想が、ようやく口にできた。あまりに驚きすぎて声が出なかったのだ。「雲の上にあるお城みたい」

「トウインランの曾祖父が、グラキア人の血を引く妻のために建てたものだそうです。グラキア神殿風ですが、主立った造りはトウイの宮殿ですね」

なるほど、見てとれる異国情緒は、トウイの遊び心が混じつたものなのだ。それにしても素晴らしい建物だった。それだけ価値ある建物に足を踏み入れていることに不思議な気持ちになる。こんなと

ところで二週間も過ごすのだ。もちろん、建物の周辺の森や海も忘れてはいけない。こんなところに楽園があったのだ。

「荷物をすべてお部屋に運びました」スウが現れた。「冷たい飲み物をご用意してありますので、どうぞ、居間へ」

居間でもイリスはため息をつくことになった。外国人向けではない、本物のトウイの伝統的な居間。絨毯を敷き、たつぷりとクッションを置き、椅子の足は低く、テーブルは棚の役割をしている。だから彼女たちの喉を潤す飲み物は、床の上の盆に並べられ、汗をかいていた。

「キツチンはどうなっているのかしら」イリスは呟いた。「まさか、かまどで煮炊きしてないわよね？」

フラムは笑った。「後で案内しましょう」

飲み物はジンジャーエールだった。控えていたスウが「お口に合いますでしょうか？」と聞いたので自家製だったようだ。イリスは笑顔で答えた。

「ええ、とても！　ぴりりとしていて、さわやかですね」

スウは笑顔になった。顔を引き締めているのが常のようだが、笑うと愛嬌のある人だ。

「？　媚を売るな？」フラムが鋭く言った。

スウは目を伏せて澄ました。「？　美人はどんな年齢にとっても美人ですから？」

イリスは笑った。声を立てて。二人は顔を見合わせ、ノイが聞く。「今のトウイ語が分かったんですか？」

「いいえ、全然」イリスは手を振った。彼女が身につけた語学は、イグレン語とフラン語だけ。「でもトウイの言葉って素敵ね。呪文みたいだわ」言葉のひとつひとつの響きが、異国語は不思議な呪文のように聞こえる。短く早く口にする、余計にそうだった。

「トウイに滞在されるなら、ぜひ言葉をお覚えいただけると嬉しゅうございます。トウイの絵本や童話など、この邸の書斎には教科書になるような本がたくさんございますので」

「書斎があるんですか？ ぜひ見せてください」目が輝いた。数ある部屋のうち、イリスは書斎が好きだった。書斎には家主のセンスが出る。家具だけでなく、本を見るのも楽しいのだ。

「絵本や童話があるんですか？」ノイがスウを見上げた。顔はもう押さえきれない好奇心ばかりになっている。

「ええ、ありますよ。見に行きますか？」

「お願いします！」ストローで一気にジンジャールを飲み干してしまつと、ノイはスウに連れられて書斎に向かつていった。弾む足取りのせいで、せっかくの行儀のいい紳士が台無しくらい楽しみらしい。もう少し本をあげられたらよかったわね、とイリスはそれを見送つた。彼の知識欲を十分に満たせる本が、自宅には少なかつたらしい。

「ノイを連れてきてよかったですね。この邸、部屋の数と本だけは多いですから」

「あなたには感謝しているわ。ここなら、誰かに追いかけ回されることはないから」でも違う意味で追いつめられそうな気がするけれど。「？ありがとう、フラム？」

トウイ語で言うと、彼は嬉しそうに笑つた。「綺麗な発音です。

トウイ語、私がお教えしましょうか」

「お願いできる？ ノイに少し教わつただけけれど、アルファベツトも曖昧なの」

「？すぐに上達するには耳で聞くのが一番覚えが早い？」

イリスは目を瞬かせた。「なんて言つたの？」

「耳で聞くのが一番覚えが早い、と言いました」

「全然だめだわ。そもそも、トウイ語には男性と女性では違う言葉を使うときがあるでしょう？ 私、あれが苦手で」

「繰り返し覚ええますよ。？あなたは綺麗だ？。さあ、どうぞ」

「？あなたは、綺麗だ？？」

「上手ですよ」微笑んだフラムの口から、また呪文のような言葉が、

ゆつくりと唱えられる。「?私はあなたを愛している?」

「?私はあなたを愛している?……ちよつと待って、発音が」聞こえやすいよう、唇の動きを追いやすいよう、彼女はフラムとの距離を詰めた。「こうすれば見やすいし聞きやすいわ」

フラムはくす、と喉の奥で笑った。「じゃあ、続けましょう」そう言つて、イリスを覗き込む。黒い瞳を美しく細めて。

「?あなたは私のもの……私はあなたのもの?」

「?あなたは私のもの……私はあなたのもの?」

しかし突然、イリスは何かがおかしいという気がしてきた。どうしてあんなに、フラムはぞくぞくするような笑い方をしてトウイ語を呟いているのだろうか?

「?キスして?」

「ねえ、フラム……」

「繰り返して」フラムは小さく言った。「忘れてしまいますよ」

「ええと……?キスして?……ねえ、なんて言ってるのか答え合わせをしてくれないと」

かぶさる影にイリスは目を見開き、唇を押し包む熱に呆然とした。触れた瞬間は驚きと怒りがかつと突き上げたが、後ろの髪を柔らかく引いて顎を上になされ、底をなめとるように口づけられると、次第にぼうつとしてきた。それほど彼のキスは巧みで、彼女が何度か繰り返して思い出したあのキスよりも、見えないところでくすぶらせたい欲望を感じられた。甘えるように鼻を鳴らしてしまう。彼の、背中を辿る手に、もつと触れられたい。

心の奥がくすぐられる。彼女は恐怖した。このままでは閉じ込めた箱から洪水のように感情が溢れ出してしまう。そうなれば、またあの失う痛みが訪れてしまう。愛する人を亡くし、一人になるのはもう嫌だ。

呻いたイリスは、彼の胸を押した。「お願い」呼吸の合間に絞り出す。「こんなことは止めて」

「あなたが本当にそれを望むなら」フラムは飢えてぎらつく目をし



ていた。「キスしてとあなたが言っただけですよ」

「言わせたのはあなたでしょう」イリスは更に彼を押しつけようとした。「これじゃカナリアじゃなくてオウムだわ。詐欺師。二度とトウイ語であなたとしゃべったりするものですか」

「いいでしょう」彼は彼女を解放した。「この島で過ごす時間は二週間もあります。あなたを素直にしてみせましょう」

「私は曲がらないわ」

「運命というものは簡単にすべてを打ち砕く」どこかで聞いたような言葉を彼は口にした。「私の意思をはっきりさせておきます。私はあなたを愛しています。占術に示されたのはあなたとの出会いだ。これは精霊が導いたことでしょう」

「私は救世主教国の出身者よ。精霊ではなく聖霊に従う教徒なのよ」日曜のミサにはもうしばらく言っていないが、イリスは見栄を張った。「あなたの信仰を馬鹿にするつもりはないけれど、思い込まないで。あなたにはもっとふさわしい人がちゃんといるわ」

言ってしまったから、イリスは後悔した。彼からありありと怒気が放たれ始めたのだ。しかし赤ではなく青を思わせる冷徹な目でイリスを見つめてくる。彼は怒ると黙るのだった。何か言っただけだが、言うべきではないと理性が働くから、瞳が輝くのだ。

結局、フラムは一言も言わずに腰を上げ、出て行った。

静まり返った他人の別荘で、イリスは倒れ込むこともできないまま、膝を抱えて自分がぶつけた言葉を反芻した。

愛されたいと叫ぶ自分があるのに、口から出るのは「愛している」と思い込まないで」なんて、私はやっぱりいやしい女だわ。彼の瞳を、声を思い出せば、胸に染み入る。彼がくれた言葉を思い返せば、もぎ取られることを望む果実のように、心が甘くとろかされていく。愛してくれる人を愛したいと望むのに、果実はいやいやと手をすり抜け、枝にしがみつく。いつか腐り落ちるときがきてしまうと知っているくせに。彼の最後の態度は、その序章に過ぎない。だったらやっぱり、私は何も答えなくてよかったんだわ。

呟いた。ふさわしい人がちゃんといるわ。こんな、異国人の女じゃなく。

朝の散歩に出たビーチは美しかった。イリスは心から安らいだ息を吐く。ティファニーの愛した浜辺も美しかったけれど、このビーチは楽園のおもむきがある。南の異国、パラダイスと呼ばれるところの静けさが。彼女は昨夜、穏やかな風の音を聞きながら、素晴らしい書斎のコレクションの中からたった一冊だけを選ぶという困難な選択をし、その本を寝台に寝そべって遅くまで読んで、目が覚めたらすぐに誰にも邪魔されない浜辺を歩くという贅沢をしていた。ノイもまた、広々としたところで羽を伸ばしているのだろう。時折足音のようなものは聞こえたが、彼は彼なりにこの島とあの建物を冒険しているらしかった。

イリスはその日、一日かけて島をぐるりと歩いた。朝食のときにスウに頼んでサンドイッチと飲み物の入った水筒をもらい、北の岬から南の浜辺へと。初めて、旅行に来たという気分を、彼女は存分に味わった。じりじりと太陽は彼女の白い肌を焼き、初めて見る鳥が彼女の頭上を飛ばたいていく。

マングローブの木の上に導かれて島の内側に足を踏み入れると、小さな川の河口からうっそうと茂る森にたどり着いた。泥でサンダルの足が汚れて、イリスは小さく笑った。泥は冷たく、心地よかった。その泥地を迂回していくと、大きな池を見つけた。その場所の水は澄み、木がずっと底にまで根を張っているのが見えた。まるで冷たいガラスを溶かしたような、美しい水だった。きっと、底には女神がいて、落とし物を待っているに違いないというくらい。その使いなのか魚が銀のひれをきらめかせ、梢からは薄き緑色の木漏れ日が振る。虫が起こした波紋が池の隅々にまで大きな輪を描いていた。

そこで食事をしたかったが、座れるような適当な場所が見当たら

なかったので、海岸まで戻り、そこで足を洗い、裸足になってサンドイッチを食べた。熱された砂浜は、さらさらと彼女の足をくすぐった。海は不思議な水色だった。砂浜から見えていれば、絵の具で描いたような鮮やかさなのに、近付けばうつすらと緑がかつた透明な水なのだ。

心穏やかだった。イリスの望むものがここにはあった。ノイの姿が見えたら最高だと思い、今度は彼を連れて探検に来ようと決める。子どもの笑い声は、どんな喜びにも勝った。もちろん、共に笑うことも。

夕暮れを待ち、水平線に吸い込まれていく紅玉のような太陽を見送りながら、イリスは邸に戻った。

その日の夕食の席に、フラムは現れなかった。スウが「散歩に出てくると言っただけ戻ってきません」と言い、「心配しなくても大丈夫です」と微笑んだ。彼はああいうところがあるのだという。

「ああいうところ？」

「一人で考えたい時、砂浜を歩かれる。昔からの癖です」

波の音を聞くと落ち着くのはイリスにも覚えがある。ただ風に吹かれ、潮の音を聞いていると不思議な心地になった。その音は、フラムと唇を会わせたときに聞こえてくるような気がした。と言っても、その場合、大波のような荒々しさを伴ってイリスの足下をすくおうとしていたけれど。

そして、多分、イリスがそう感じていることに、フラムは気付いているのだ。

食事は、トウイの料理ばかりではなかった。トウイから更に西へ行った、大河が流れる国イーディカの、ヨーグルトや香辛料につけ込んだ鶏肉を焼いたものや、汁物が添えられた炊き込みご飯が出てきた。果物の酸味とハーブが香るソースがかかったサラダは新鮮で、

味付けは辛いものではなく、どちらかというと甘みが感じられ、ノイの気に入るところだったようだ。

ノイは素早く食事を終えてしまうと、書斎に行ってくると言って駆けていった。ずいぶん本が気に入ったようだ。

イリスもまた、食事を終えると少し休んでから、海岸を歩いてくると言って邸を出た。森を出るのはさほどかからなかった。車が通る道は、景観を損なわないように遠回りに作ってあるらしく、イリスが歩いたのは、人が通れるくらいに舗装された徒歩専用の小さな道だ。それは島の西側の海岸に向かっていた。

青紫色に染まる空、水平線は青い鈍色で、海もまた同じ色をしていた。風が吹き、イリスがやってきた梢を揺らした。砂浜に降り立つと、南側に向かっていく足跡を見つけた。フラムだろう。

ここで待つていれば戻ってくるかもしれない。そうでないかもしれない。

彼に会いたいのか会いたくないのか、イリスにはまだ分からなかった。ただ、彼のキスは彼女の奥底を揺らした。眠りから覚ますように。王子様を待つ年頃ではないイリスは、しかし少女のように砂浜に座り込んだ。

いつかもこうしていた気がする。あの時は立っていただろうか。風と海を聞いていた。遠いところを思つて。

気付けば、彼女の方へ歩いてくる人影があつた。金色だが重厚感のある上着と、肩にかけた赤い布、黒のズボンを着た男だった。まるで夜を連れてくるような歩みで、イリスに気付き、笑顔を浮かべた。知らない男だ。だが、身なりは正装のように思えた。

「金髪の天女がいる」くすぐるような声で男は言った。「水浴びするなら我が家の噴水はどうか」

「ミスター・タウンイラン？」ぼうつとしていたイリスは慌てて立ち上がった。「私は……」

「当ててみせよう」言いかけた彼女を彼は制した。「トウト・サワン？ それともテープテターかな」

イリスは困ってしまった。「申し訳ありません、私、トウイ語は堪能でなくて」

気を悪くした風でもなく、むしろ楽しげに彼は肩を揺らして笑った。「これは口説きがいがある」

笑ってくれたことにほっとしたイリスは言った。「ご招待ありがとうございます、ミスター。とても素晴らしい島ですね」

「どうもありがとう、トウト・サワン。招待したのは私ではないが、星も海も私に素晴らしい出会いをくれたようだ」

彼は目を丸くするイリスに笑う。ではこの人は誰だ。イリスはうるたえて視線をさまよわせた。

「でもあなたはトウンイラン氏なのでは」

「確かにそうなのだが、トウンイランを名乗る人間は百人はくだらないな」彼は潮風に乱される髪を撫で付けた。「しかし、こんなことをする人間は限られているがね」

彼は大股にイリスとの距離をつめた。黒の瞳は、彼女の底を探り、イリスのすべてを見透かすようだ。

「魔法にかかっているね」男はそう言った。「古い古い魔法、精霊たちの遊び心と運命を秘めた力だ」

「魔法？」

彼が口になると、マジックという言葉は神秘を持ったものになる。イリスの口からではただのおとぎ話だ。

「そう、魔法だ。精霊たちが君に少し悪さをしたようだね。取り戻さなくては」

「私、泥棒には遭っていません」

「そうだろうとも」彼は心からの同意を示した。「盗まれたのではなく隠されたのだよ。かれらは弱い心が好きだから。でも、どうやら遊んでいるつもりらしいな」

「何をおっしゃっているのか……」緩く首を振る。イリスにはいた

ずらされた覚えも、盗まれたものも、何かを失くした記憶すらなかった。

「それが解けるのは君の側にいる人間だ。さて、そのタウンイランは何をしているのかな」

「こちらにはいらつしやらないと思いますわ。私、氏の招待で、彼の知り合いという人と来たんです。フラムと言います」

「フリー・ラム？」彼はにやりとした。「そうか、君はあいつの恋人か」

イリスは一瞬息を詰め、息を大きく吸って答えた。

「恋人ではありません。友人です」

「フリー・ラムの友人の中でも最も親しい人、更に言うなら一生涯そばにいたいと考えているんだろうさ」

機嫌良く彼はイリスに両手を広げ、その手で肩を押した。イリスは当惑で渦を巻く思考で考えた。本当に、フラムは私の一生涯を考えているのかしら、この人に分かってしまうくらい明確に？ 胸が鳴る。疑惑の一部が、儚い希望に変わりつつあった。

「さて、あいつの顔を見よう。彼は私に会いたくないだろうが、私は彼に用があるのでね」

海岸から邸への道を行き、イリスはどのタウンイランが分からない男性とともに戻ってきた。帰ってきたことを知ったスウが現れ、こちらを見て息を飲み込んだ。

「？コウ・イム様？」

「？やあ、スウ。お守りご苦労？」朗らかに彼はスウの肩を叩いた。

「？フリー・ラムはいったい何の遊びをしているんだ？ こんな女性を捕まえて。かわいそうに、あいつのことを知らないみたいじゃないか？」

「イリス様」スウはイリスに微笑を浮かべた。「ノイは書斎にいますよ」

「ええ……」追い払おうとしているらしい。連れてきてはいけない

人だったのだろうかと不安になる。「見てくるわ」

イリスが気がかりを残したまま遠ざかったとき、トウイ語がかわされる声が響いていた。それは一方は気安げに、一方は少々固くなっているように聞こえた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1485w/>

---

歌ってレディバード

2011年10月8日03時27分発行